

\* 結 晶 母 \*

Vol. 02

テラルネ

- P04.** 特別対談 鬼丸 昌也 & 小川 真吾
- P16.** 世界を変える 3 つの提言 ～30の行動目標～
- P18.** アフリカを変える 5 つの行動目標
- P26.** アジアを変える 5 つの行動目標
- P32.** 日本を変える 20 の行動目標
- P42.** 東日本大震災復興支援 ～3年目のチャレンジ～
- P48.** テラ・ルネッサンスを支える人々  
～株式会社ウエダ本社～
- P54.** テラ・ルネッサンスを支える人々  
～ファーストステップ・ジョブグループ～
- P58.** 次世代が語る NPO の未来
- P64.** 協賛広告



結晶ができる時、最初に生まれる結晶を結晶母といいます。  
結晶母の周りに同じ形をした元素が集まって、  
ひとつの大きな結晶をつくります。  
一つひとつの結晶は小さくても、結晶母を中心に集まった  
大きな結晶のネットワークは強く、たくましい！  
そんな大事な結晶母の役割を、地球に住む一人ひとりが果たせたら・・・  
との願いを込めて名付けられました。

かつて、人と自然が共存していた時代、  
「私」と「あなた」が違うことは、喜びの種でした。  
お互いがお互いの役割に助けられ、喜び合い、ともに生きていました。  
テラ・ルネッサンスは、そんな皆様方の「役割」に支えられ、  
これまで活動を続けていくことができました。  
これからも、多様なひとり一人が力を合わせて、  
50年後の子どもたちを想いながら、  
多くの皆様方とともに歩み続けていきたいと願っています。

# テラ・ルネッサンス

## らしくあることで、

## テラ・ルネッサンスは

## 成長する

特別対談



鬼丸 昌也 (おにまる まさや)

高校在学中にアリヤラトネ博士(スリランカの農村開発指導者)と出会い「すべての人に未来を造り出す力がある。」と教えられる。様々なNGO活動に参加する中で、異なる文化、価値観の対話こそが平和を造り出す鍵だと気づく。2001年、立命館大学在学中にNGO「テラ・ルネッサンス」設立。テラ・ルネッサンス理事。



小川 真吾 (おがわ しんご)

大学卒業後、青年海外協力隊員としてハンガリーに派遣、旧ユーゴ諸国とのスポーツを通じた平和親善活動などに取り組む。帰国後、カナダ留学などを経て2005年より、テラ・ルネッサンス、ウガンダ駐在代表。ウガンダ及びコンゴ民主共和国における元子ども兵の社会復帰支援事業などに従事し、2011年テラ・ルネッサンス理事長に就任。



ウガンダ北部で、テラ・ルネッサンスの支援を受けて、木工大工の仕事を開始した元子ども兵

私たちテラ・ルネッサンスが、最も大切にしているのは、「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」という設立目的や使命・活動理念です。何か活動を始めるときには、必ず目的や使命、活動理念(P15に記載)と照らし合わせて、私たちが行うべきことなのか、私たちにふさわしい行動なのかを、考えるようにしています。いわゆる「テラ・ルネッサンスらしさ」の原点が、目的や使命、活動理念なのです。

今回の結晶母では、テラ・ルネッサンスが、さまざまな人々や組織とつながり、国内外での支援活動などに取り組んでいる様子を、紹介することになっています。そのつながりの始まりは、人々や組織が、テラ・ルネッサンスらしさに共感してくださったことです。

そこで、テラ・ルネッサンスらしさとは何か、テラ・ルネッサンスらしさを具体化するために、自分が果たすべき役割とは何かをテーマに、創設者・鬼丸と理事長・小川の対談を行いました。ファシリテーターは、プロボノとしてテラ・ルネッサンスの組織開発・人材開発にかかわってくださったという増田弥生さんをお願いいたしました。

**鬼丸昌也(以下、鬼丸)** テラ・ルネッサンスらしさを大切にしたいと、常々、スタッフやインターンに伝えてきたのですが、その「テラ・ルネッサンスらしさ」とは、いったいどんなものなのか。この機会に、テラ・ルネッサンス創設者である私と、

現在、理事長を務めている小川との対談を通じて、考えていきたいと思いました。

今回の対談にあたり、ファシリテーターを増田弥生さんにお願ひ致しました。弥生さんは、リコーを経て、リーバイス、ナイキという2つの多国籍企業で、人材開発、組織開発を担うという経験をお持ちの方です。私たちの目的や使命・活動理念、そして活動に共感をいただき、テラ・ルネッサンスの組織開発、人材開発に、プロボノとして関わっていただいています。

弥生さんからテラ・ルネッサンスとの関わりについて、少しお話をいただけますか。

**増田弥生(以下、増田)** 私は25年間、ずっと企業のなかで、会社員として働いてきて、特にリー

### 増田 弥生 (ますだ やよい)

専門は企業のグローバル戦略推進のためのリーダーシップ開発・組織開発。

リコー、リーバイスを経てナイキ米国本社へ。企業内のリーダーとしてアメリカをはじめ世界各地で、企業価値の世界規模での浸透と向上に主眼をおいた組織作りや、グローバルリーダーの発掘と育成に長年携わる。現在は帰国しフリーで活動。組織のグローバル化支援、グローバルリーダーの育成、組織開発、経営幹部チームビルディングなどを得意とする。

著書に「リーダーは自然体」(光文社新書より神戸大学金井教授との共著)



ダーの育成や人材育成を通じて組織を成長させる仕事をメインにやってきました。幸い私が勤めた企業が、一人一人の可能性を信じて丁寧な育てながら成果を出す組織だったこともあり、一人一人の可能性を信じて軸に仕事をしてきました。その結果、可能性を信じてこそが、人と組織の成長を導いていくと信じるに至りました。その体験に基づく「実感」が、鬼丸さんの講演を聞いたときに、テラ・ルネッサンスが大切にしている価値観と合致したんですね。そのようなきっかけで、人材開発や組織開発分野での経験を活かして、テラ・ルネッサンスの何かお役に立てたら、嬉しいなと思います、プロボノとして関わらせていただいています。今日は、お二人から、お話を伺えるのを、とても楽しみにしています。



人や社会に貢献することが、  
私たちの誇り

**増田** まず、お二人にお伺いしたいのですが、テラ・ルネッサンスで働く「誇り」とは、どのようなものかお聞かせいただけますか。

**小川真吾（以下、小川）** テラ・ルネッサンスでは、ウガンダやコンゴ、今年からはブルンジでも、元子ども兵の社会復帰支援プロジェクトを行っています。そのプロジェクトの対象としている人たちというのが、子ども時代に誘拐され、その時の体験というものを聞けば聞くほど、凄まじい体験をし

もを自分の力で育てている時など、そのシチュエーションは様々なのですが、他者のために自分が何かしていることを話すわけです。

そういう話を、元子ども兵たちから聞くと、そのような機会を提供した現地人職員にとっても、私たち職員にとっても、何より、支援者の皆さんにとっても「誇り」だと思っんですね。

**増田** 小川さんのお話を伺っていると、水面に小石を落としたときに、波紋が広がるみたいに、テラ・ルネッサンスの支援を受け、自立をした元子ども兵たちが、誰かの役に立っていることで、誇りを感じる。現地のスタッフたちも、やはり、元子ども兵の役に立っていることで、誇りを感じる。それを日本において、支えている小川さんや京都事務局のスタッフが誇りに感じている。誰かに寄り添う、支援することで、誇りを感じるというのは、テラ・ルネッサンスのすごく一貫したテーマですね。

テラ・ルネッサンスらしさが、  
すべての判断基準に



**小川** そうですね。2011年に、ウガンダでの支援事業の運営を、現地スタッフに任せる上で、心配だったのが、先ほどのような考え方に基づいて、支援を続けてほしいということだったんです。誰かのために役に立つことが、自分の誇りになるからこそ、受益者を主人公に、そして、受益者一



洋裁の技術訓練を終了して、現在、洋裁店を営んでいる元少女兵(第1期生)。彼女にとっては子どもを育てることが仕事の励みになっている。



ウガンダ北部の国内避難民キャンプの様子。多くの住民が襲撃により命を失い、子どもたちが誘拐され強制的に徴兵された場所でもある。

ているのですね。また、軍隊から戻ってきたとしても、生活することすらままならないような状況を抱えています。

そういう元子ども兵たちが、私たちの支援を通じて、一日一日、変化していくのです。たとえば、最初は、文字が書けないという人たちが、文字を書けるようになるとか。現在、プロジェクトは、現地人スタッフが担当しているのですが、そのような報告を電話などで聞くと、その一つ一つの変化に、私は「誇り」を感じますね。

そして、そのような変化を遂げていく元子ども兵たちの何がすごいのかというところ、識字能力や、職業技術を身につけて、収入を得られるようになること、そのお金を、自分の子どもであろうと、近所の人であろうとも、まず、他者のためにも使おうとするんですね。

それが、彼ら彼女らにとって、自身の誇りにつながっていると思います。私たちが大事にしているのが「自尊心」。自尊心を高めていくことを、とても大事にして、現場の事業を運営しています。

元子ども兵たちには、自尊心の程度を測る10項目の質問をすることがあります。その回答で、自尊心が高まっている人とその理由を聞いてみると、ほとんどの人が、「自分が他者のために何かしている時のこと」を話すんですね。たとえば、自分が収入を得て、近所のおじいちゃんに、ミルクを買ってあげたときや、自分が得た技術で、近所の人に洋裁のやり方を教えてあげているとき、子ども

一人一人に応じた支援を行うというきめ細かさを大切にしているのは良かったです。それがないと、テラ・ルネッサンスが行う支援の意味や価値が薄れてしまうと思っつたんです。

ウガンダを含めてアフリカでは、いろいろな団体が活動をしているわけですね。僕らよりも、もつとスタッフを何十人も抱えている国際NGOや国際機関では、大規模な支援を一回一回成り行っていく。資金的にも、人材的にも、僕らには同じことはできませんし、しようとも考えていません。だからこそ、テラ・ルネッサンスにしか実現できない価値って何だろうと考えるんです。それは、やっぱり、先ほどのようなきめ細かい、一人一人の状況に寄り添った質の高い支援を行うことだと。その重要な価値を、なんとしてでも現地スタッフにきちんと理解してもらい、事業運営に反映してもらうために、彼らとのコミュニケーションの中で、意識をして伝えてきました。

**増田** テラ・ルネッサンスが大切にしている価値観、テラ・ルネッサンスらしさを大切にするために、常に意識して、コミュニケーションされているんですね。ちなみに、具体的な仕事のやり方、進め方で、テラ・ルネッサンスらしさを揺るがないようにする工夫などはあるのでしょうか。

**小川** そうですね。たとえば、事業運営を任せた現地スタッフから、新しい受益者（支援対象者。この場合は元子ども兵）を選定するのが難しいから、どうしたらいいかと相談があるわけです。新し

理事長交代で心底信じていることができた  
「全ての人に未来をつくる力がある」  
という理念

い受益者を受け入れるときには、行政や他団体との話し合いをしながら、受け入れの優先順位をつけていくのですが、その話し合い、調整が難しい。だから、現地人である自分たちに決めるのが難しいとなるのです。その時、彼らに伝えたのが、テラ・ルネッサンスが大切にしている価値観。受け入れ対象になつている元子ども兵にとつて、何が一番必要なかを考えてほしい。その対象にとつて、私たちの支援が必要であるのならば、受け入れようと。とても重要で、難しい判断なんです。どの元子ども兵に支援をするのかを決めるのは。だからこそ、テラ・ルネッサンスが大切にしている価値観をベースに、現地スタッフで考え、判断してもらうように、問いかけを続けています。

**増田** つまり、そういう問いかけを入れながら、現地スタッフと、対話をしていく途中で、テラ・ルネッサンスらしさに思いを巡らせてもらうという、そういうことなのでしょう。

**小川** そうですね。僕から答えを示すことは、ほとんどないですね。今は、僕も現場にいないし、受益者と面談もしていません。僕が判断できることは、限られているんですね。だからこそ、現地スタッフたちで、テラ・ルネッサンスが大切にしている価値や、原理原則がなんだったのかを思い出してもらつて、考えて、判断してもらえらるような、そういう問いかけをしていますね。

それがやっている姿を見たときに、「本当に一人一人に未来をつくる力があるんだな、一人一人に未来を創る可能性があるんだな」つて、改めて自分で信じてることができたのが、この2年間だったような気がします。その変化そのものが、僕にとってはすごく嬉しかったです。

**増田** それはまさに、テラ・ルネッサンスの理念である、「全ての人に未来をつくる力がある」、「全ての人の可能性を信じる」つていうのが、組織のなかでも体現されているということですよ。本当に素晴らしいと思うんですけども、それは、理念を強く意識して組織を運営していらつしやるということなのでしょう。

**鬼丸** たぶん最初は、無意識だつたと思います。ようやく最近、理念に基づいた組織運営を、意識するようになってきたのだと思うんですが。

もともと資金もない、人脈もない、英語もしゃべれないつていう状況のなかで、自分が望む理想やビジョンを実現しようと思つたら、自分だけでは限界があるつていうことを痛感していました。そうすると、人にお願ひするしかない、人に任せるしかないつていうふうに思つていたわけですよ。すると、その人にも未来を創る力があると信じて、じゃあ、この部分をお願ひするよね、この部分を任せるねとするしかないんです。

その任せた最初の一人が、小川です。だつて、僕は、英語をまったく話せません。アフリカに行き、駐在する勇気もないし、現場も回す自信もな

**増田** 素敵ですね。テラ・ルネッサンスが大切にしている価値観、考え方のエッセンスが詰まつているお話ですよ。同じように、日本国内でのテラ・ルネッサンスの取り組みで、テラ・ルネッサンスらしさを具現化、具体化していることはどのようなことでしょうか。

**鬼丸** そうですね。2011年に、小川へ理事長を交代して、活動拡大、資金調達のために、東京に生活の拠点を移して、京都事務所から離れてみたくんです。そこで気づいたのは、シヨックでもあつたのですが、自分が離れていても日常業務がしつかり回つているということだつたんです。そのことを、痛感できたことが、良かったなというふうに思っています。つまり、細かいことまで指示しなければ、スタッフは動かないのじゃないかつていう恐れがあつたんです。けれども、それは、テラ・ルネッサンスらしくなかつたんだ、と思うんですね。一人一人に可能性があるはずだし、一人一人に未来をつくる力があるはずですよ。

物理的に、京都事務所から離れることによつて、スタッフ一人一人が考えて、自ら動いて、そして、各地の受益者のためにも、支援者の皆さんと共に行動していく。テラ・ルネッサンスが望む社会を実現していくために必要なことを、スタッフそれ

い。それで、小川に任せて、赴任してもらつたら、元子ども兵士としっかりと向き合いながら、社会復帰のプログラムを作りあげてくれたのです。現在、カンボジアに駐在している江角も同じです。

それを無意識でやっていた僕が、理事長交代を機に、京都事務所を離れたことで、国内で働いているスタッフやインターンの皆さんにも、意識をして「信じて、任せる」ことができるようになった。その時点で、ようやく、全ての人に未来をつくる力があるという理念を、本気で信じて、組織運営にあたれるようになったんじゃないかなという気がしますね。

**増田** そうなんですね。なんだか、関心しちゃいます。

**小川** そうですよ。私も、彼が、よくテラ・ルネッサンスを設立したなつて思いますもの。最初の理念とかをつくりあげたのも、21とか22でしょ。

**増田** そのときに、この理念を創つたんですか。そんなに早く？

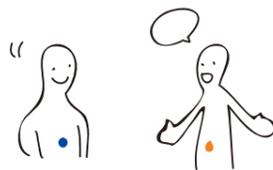
**小川** たぶん当時の本人（鬼丸）は、なにか哲学的、論理的な思考で、目的や理念を作り上げたのではなく、ある意味、直感で理念も、活動も組織も作り上げてきたのだと思います。

**鬼丸** 正確に言うと、理念は、設立当時から、おぼろげにあつて、きちんとあのようになり文化したのは、2005年だと思えます。もともと目指すべき目的である「全ての生命が安心して生活できる社会の実現」は、創立当時から掲げていまし



(右) 現在、東京に拠点を移して、講演活動や新たな取り組みにチャレンジしている創設者(鬼丸)

(左) 京都事務所を拠点に日々の活動に取り組む、職員、インターン生、ボランティアの皆様





(右) コンゴ(民)事業のモニタリング調査の様子。

(左) さまざまな心の傷や困難を抱えながらも、社会復帰の訓練を修了したウガンダの元子ども兵たち



た。組織の使命・活動理念に関しても、おぼろげに心の中にあつたのですが、あのような形に明文化したのは、NPO法人を設立するときでした。

### 理念が生まれた原体験を語る

**増田** そうなんです。ところで、そもそも鬼丸さんを、テラ・ルネッサンス設立へと突き動かしたものは、何なのでしょう？

**鬼丸** 自分自身が育ってきた環境に、大きな影響を受けたのだと思います。福岡県の北九州市という大都会で生まれて、父の事業の失敗がひとつのきっかけとなって、実家のある人口千人ちよつとの村に引っ越しをしてきました。

村の中心地から、実家が4キロも離れていて、しかも、公共交通機関がない。家から一番近いスーパーまで、車で30分ぐらいかけて行かないといけない。学校に通うにしても、友達の家遊びに行くとしても、買い物に行くにしても、誰かの力を借りなければ目標を達成することができない環境にいたわけなんです。すると、どのようにコミュニケーションして、その人の力を借りるかという能力は鍛えられたんだと思うんです。その背景がある上で、高校3年生のときに、スタディツアーで、スリランカに行き、サルボダヤ運動というアジア最大のNGOの指導者、アリヤラトネ博士に出会って、彼に教えられたんです。「全ての人に未来をつくる力がある」のだと。

**増田** どうコミュニケーションしたら人の力を借りられるかということを意識されていた高校生に「全ての人に未来をつくる力がある」というメッセージが響いたということですか。

**鬼丸** そうなんです。アリヤラトネ博士に、語りかけられるわけです。そのときに、僕の生まれ育った環境と、博士の言葉がミックスされた。「全ての人に未来をつくる力がある」のだったら、全ての人にお願いをしたらいんじゃないかと。私の力が足りなければ、私が持っていない、能力が不足しているところがあれば、それは人にお願いをすればいいんだと。だから、自分は自分にできることをしたらい。自分のできないことにフォーカスをあててしまい、行動を起こすことを諦めるのではなくて、自分のできることだけに、フォーカスして行動を起こしていくこと。この習慣は、生まれ育った環境のなかで得てきた体験・感覚と、18歳の夏休みに、サルボダヤ運動のアリヤラトネ博士から教えてもらった、全ての人に未来をつくる力があるって言葉が重なって培ったものなんです。

だからこそ、テラ・ルネッサンスを創るときに不安も恐れもなく突き進むことができたんだと思います。だって、自分にできることを一生懸命やって、できないことは、人にお願ひすればいいのですから。

**増田** その鬼丸さんの個人的な体験や考えてきたことが、先ほどの小川さんが話してくださった元子ども兵の変化につながっている。まさに全て

の人に未来をつくる力があるという理念を、一貫して具現化しているのですね。

### その人の「今」に注目して関わることの重要性



**小川** この「全ての人に未来をつくる力がある」という理念に対するとらえ方が、最初に聞いた時と、今では少しずつ変化をしている気がします。ウガンダで、元子ども兵たちが困難な状況であったとしても、変化・成長していく姿を見るとき、やっぱり人は変化をすることができるし、未来をつくることができると強く信じられるようになったのだと思います。そして、一人一人の状況に応じて、支援を続けていくと、全員が変化していくんです。だからこそ、一部の人はなく、全てのの人に未来をつくる力があるって信じられるんですね。

また、過去を変えることができるけれど、未来は変えることができるということも、併せて実感しています。元子ども兵の支援では、彼ら彼女らの弱い部分に、まず焦点を当てて、それを取り除こうとするのが、一般的な支援なんです。つまり、その子が怪我をしていたら怪我を治してあげなきゃいけないし、心に傷を負っていたら、その傷を治療してあげないといけないということですよ。

けれども、現場で支援に取り組む中で、治療す

る、悪い部分を取り除くというアプローチだけでは十分ではないと思うようになってきたんです。つまり、PTSDやトラウマの原因となっている「過去」を診ているだけでは、本質的な解決にならないと考えたんです。

元子ども兵の抱えている過去ではなく、その元子ども兵が持っている何らかのちから(能力)に着目して、その能力を信じて、引き出すための支援を行うことが重要だと思っんです。過去ではなく、今に注目する。すると、元子ども兵たちが、そのちからを伸ばしてくるんです。そして、自立への道を一步一步と歩み始める。だからこそ、過去は変えられなくても、今は変えられると信じていることができるんです。

**鬼丸** テラ・ルネッサンスの目的・使命・活動理念の確かさを証明してくれたのは、小川を含めたスタッフ、インターン、僕らが関わってきた受益者、支援者一人一人ですよ。例えば、支援者に関しても、テラ・ルネッサンスを支援することを通じて国際社会に興味を持つたり、小学生、中学生のときに講演を聞いて、進路を国際協力に関係するものを目指したりとかいう事例を、この13年間沢山見てください。だから、僕らは、目的や使命や理念に、迷うことなく、真っ直ぐ向かうことができる。

### 創設者と理事長の役割分担

#### 互いの足りないところを

#### 補いながら進む



**増田** 大きな企業や組織でも、理念や価値観を日々の活動や経営に体现しつつ成果をあげていくのは並大抵のことではないので、テラ・ルネッサンスのこれまでの軌跡や成果は本当に頭が下がります。同時にそうされているからこそその成果なのだと確信します。話題は変わるのですが、小川さんと鬼丸さんの中で、お互いの役割分担は、どのように意識をされていますか。

**鬼丸** 理事長は、テラ・ルネッサンスが行う事業運営や組織運営の責任を持つ人。つまり、事業を実施するにあたって、最終的な決定権を持って運営をしていく人だというふうに思っています。以前、僕が理事長だった時は、この法人の代表として最終的な決定権を持って、責任も持って運営をしていました。同じことを小川には期待していません。ただ小川のやり方があると思っています。

**増田** 鬼丸さんは、理事長を退かれて、東京に活動の拠点を移されたから、ご自身の中で、役割がどんなふうに変わられたのでしょうか。

**鬼丸** 理事長を退任しても、法人の理事として自分の担当する仕事、例えば資金調達、講演活動は担っています。その上で、新たな役割として、創設者という肩書が付きました。このテラ・ルネッサンスを創った者として、私たちの目指すべきものがある目的・果たすべき使命・抛り所とする理念を、自らの存在や言葉、行動で、体现をしていく、表していく。それを職員や支援者や、これから出会う人に伝えていく…。そんな「語り部」的な役割を果た

者だから、危険な地域で事業を始めるにしたとしても、やっぱり安全は確認する。組織や事業運営でも、失敗をしたくないという感覚が強い人間なんです。だからどうしても細かいところ、口を出していく癖があるんだと思います。けれども、時間的に、能力的に、すべての事業の細かいところにかかわることができないと分かったときに、もう任せるしかないわけですね。そのときに、いわゆる価値観をベースにした運営を目指すようになったんです。価値観というか、思いを共有して、任せて、信じて、自分の意図した以上の動きをそれぞれが展開をしてくれるっていうことがよく分かりました。

とにかく相手を信じて。我々にとって困難な状況が降りかかったとしても、それでも人や社会を信じるんだ。現象にとらわれるのではなくて、人や社会、時代を信じるという強さを持つということが、私たちのビジョンを実現する。それが、僕らの強さにならなくて、原動力にならなくていいっていうことを、先ほど、申し上げたような体験を通じて、改めて学んだ気がします。

**小川** 僕らは、毎朝、朝礼で、目的・使命・活動理念を唱和しています。いつも、スタッフやインターンの皆さんには話をしていのですが、理念というものは、人に話すものではなく、常に自分に問いかけるものなんです。だから、自分に問いかけてみると、まだまだ理念を実践できていない自分がいるんですね(笑)。理念に照らし合わ

すことができればなというふうに思っています。

**小川** そうですね。改めて、今日の対談で感じたのですが、鬼丸がいろいろなことに取り組んでいます。彼の本質的な役割は、テラ・ルネッサンスの目指すべきところを、きちつと、周囲の人に伝えていくこと。まさに、語り部ですね。

**増田** 語り部という言葉だけを聞くと、かなり貫禄のある方を想像してしまいがちですが(笑)。でも実際なさっていることは、そういうとても大切なことですね。小川さんは、お二人の役割をどのようにとらえていますか。

**小川** 僕は、新たに理事長に就任して、テラ・ルネッサンスの行う事業運営に、責任を担うことは、大きな役割だと思っています。あわせて、テラ・ルネッサンスらしさを、スタッフや外部の関係者、市民社会に伝えていくことも、私の大事な役割なんだと感じています。二人で、それぞれお互いのできるところで、お互いのできないところを補っていく関係じゃないかなと思います。

**増田** ここでもお二人の話から、一貫して伝わってくるのは、テラ・ルネッサンスらしさ、テラ・



テラ・ルネッサンスの京都事務局と岩手事務所の合同ミーティングの様子

せて、ある時は、「よくできている」と評価する時もあるし、そうではない時もある。だから、自分の中では、常にパフォーマンスがない状態。

**増田** そんな風に振り返り、内省をされるんですね。自分でね。

**鬼丸** そうですね。うちの強みといえば、目的・使命・理念を、こういう世界を、組織を、活動を目指しますと、外に掲げるものもあるんだけど、それ以上に、自分の成長を図るものさしとして考えているんですね。基本的に、理念を、自分の成長度合を図る「ものさし」として、自分に問いかけているから、活動へのモチベーションが、それぞれの内側から発せられる。

**増田** 内発的ですよ。すごくね。

**鬼丸** まさに。内発的に「力」を引き出す、もっ

ルネッサンスのDNAみたいなことを、365日、24時間、組織内部の運営、対外的な活動、そして何よりもご自身の生き方も含めて、常に意識をしていらつしやる。それが、テラ・ルネッサンスの強みなのではないか。

**鬼丸** そうなんです。自分のあり方、生き方と、テラ・ルネッサンスを切り離すことが、自分の中ではできないんですね。

**小川** うん。そうそう。

理念は自らに問いかけるもの  
内発的なちからを引き出すために



**増田** ずっとお二人のお話を伺っていると、自分が変化、成長し続けることを信じていらつしやると感じます。この数年で、ご自身の変化・成長から学ばれたことはどんなことでしょうか。

**鬼丸** 僕は、改めて、信じていることの大切さを学んだと思います。

**増田** どういうことでしょうか。

**鬼丸** 結局、僕は、初心者なので失敗したくないんですね。だから、できるだけリスクは避けようとする。やっている活動と真逆なことを言うんですけど、基本的にリスクはとりたくない人間なんです。

**増田** 鬼丸さんがですか？ おかしい(笑)。

**鬼丸** 初心者ですから。

**小川** リスクだらけなのに(笑)。

**鬼丸** リスクだらけ。だから逆に言うと、小心

とも大切な文章なんだ、と思うんですね。

テラ・ルネッサンス  
創立20周年にありたい姿とは



**増田** ここまで、お二人を含めたテラ・ルネッサンスの成長を、垣間見せていただいたのですが、これからのテラ・ルネッサンスはどんな成長を遂げると考えていますか。たとえば、設立20年目(2021年)の時は、どのような組織で、どんな存在になっているのでしょうか。

**鬼丸** 今よりも多くの職員、インターン、ボランティアさんや、支援者さんが、僕らの掲げた「目的・使命・理念」に沿って、国内外の事業に関わっているということ。そして、それぞれがテラ・ルネッサンスに関わることによつて、『自分の中にも未来を創るちからがあるんだ。社会変革の担い手なんだ』っていう確信を持つてほしい。そういう人を増やしていきたいと思います。抽象的な表現かもしれないけれども、自分が社会の担い手であると、未来を創るちからを持つ者であるという認識・自覚を、テラ・ルネッサンスを通じて得た人が、もうそれこそ、数万人や数十万人いるような状態にもつていきたい。そうすると、きっと社会はおのずとより良いものに変わっていく。そのために、講演活動を含めた自分に与えられた「役割」を果たしたいです。

**小川** しつかり活動の基盤を整備していくことで、活動の規模を、質量ともに成長させていきたい



特定非営利活動法人テラ・ルネッサンス設立目的・使命・活動理念

## 設立目的

すべての生命が安心して生活できる社会 (=世界平和) の実現

## ミッション (使命)

当会の事業を通じ、人々に『次世代に対する責任』を啓発し、  
それぞれが個人、家庭人、社会人、そして地球市民として、  
未来の子どもたちの生活をも視野に入れた生活(簡素な生活)を  
実践することにより、人類共通の理想『世界平和』を実現する。

## 活動理念

1. 私たちは一人ひとりに「未来をつくる力」があると信じ、市民の可能性を追求しています。
2. 私たちは内なる変化がすべての変化の始まりであり、変革の主体者は私自身であることを理解しています。そして、他人も変革の主体者であることを理解し、相手を尊敬しています。
3. 私たちはあらゆることは常に変化することを理解し、あきらめずに活動し続けています。

いですね。そして、その先に、日本的な、アジア的な価値観に基づいた問題解決アプローチの重要性を、世界に発信していきたいと思っています。その役割は、国際政治のパワーバランスで身動きのとりにくい政府や、営利を追求する企業セクターよりも、目的・理想にまつく進むことのできる NPO・NGO が担うべきだと思っんです。そして、生意気かもしれませんが、テラ・ルネッサンスのように社会変革を目指して、支援活動を行っている NPO・NGO として、日本国内には少ないように感じています。だからこそ、テラ・ルネッサンスの果たす役割は非常に大きい。そのためには、その役割を果たせるだけの組織・活動の規模を質量ともに成長させていって、支援者を含めた市民社会に、影響力を与えることのできる組織になる必要性があると感じています。

**増田** 他の組織や団体のベンチマークになる、ロールモデルになる組織を目指すということですか。

**小川** はい。たとえば、そのような話をしても、まだ「鬼丸くん、小川くん、いい考え方を持っているねえ」という話になっちゃう。だからこそ、学術的な分野でも、僕らの理念や組織運営、事業成果が評価されるように、発信できる能力も持ちたいですね。

テラ・ルネッサンスらしくあることで、  
テラ・ルネッサンスは成長する



**増田** 先ほど、8年後の20周年時に、こんな組織を目指したいというお話を伺いました。それを実現するために、自分は必ずやりますというものを教えてください。あわせて、スタッフの皆さんに、これは成し遂げてほしいということがあればお聞かせください。

**小川** テラ・ルネッサンスが行っている様々な事業を、何のために、誰のためにやっているのかというところを、まずはスタッフ、インターンに伝えていく役割を、しっかりと果たしたいと思っています。何のために、誰のためにという目的意識がないと、より良い仕事はできませんから。

スタッフの皆さんには、それぞれの仕事・作業の意味を理解して、取り組んでほしいと願っています。今、自分の取り組んでいる仕事や、どんな意味があるか、何につながっているのか、常に意識してほしい。この仕事を完了した先に、組織や受益者、果ては世界に、こんな影響力を与えるのだと、そこまでするイメージをして仕事に取り組んでほしいと思います。

**鬼丸** 20周年までに、自分が果たすべき役割は、僕とご縁をいただいた方に、僕らが大切にしている、テラ・ルネッサンスの目的・使命・理念を、より分かりやすく、より丁寧に伝えるように自分の力を磨いていきたいと思えます。職員の皆さんには、私も含めてそうなんですけども、テラ・ルネッサンスらしさっていうのを、常にど真ん中においてほしい。テラ・ルネッサンスらしさ、らしい行動、

生き方、あり方っていうものを、常に日々の活動の真ん中において動いてほしいなあと思います。

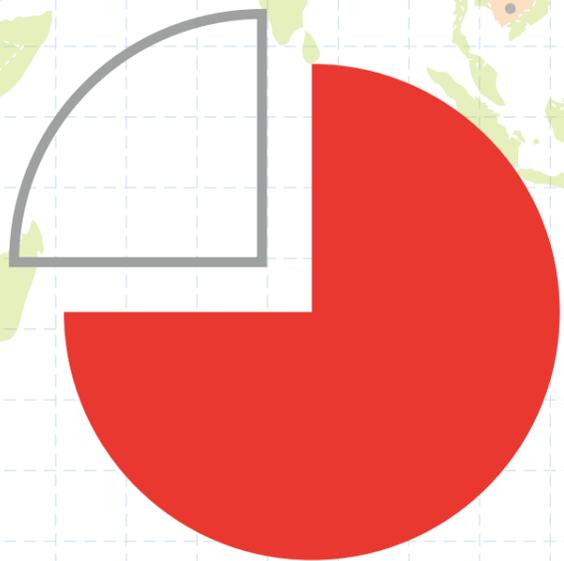
**増田** なるほど。それでは、お願い上手の鬼丸さん(笑)。支援者の皆さんに、今、何をお願いしたいですか。

**鬼丸** ぜひ、テラ・ルネッサンスを、より使っていただきたいと思えます。テラ・ルネッサンスを支援することを通じて、私たちの掲げている理念のなかにもありますが、自分の内側に、この社会を変革する力、未来をつくる力があるということ、より強く信じていただきたい。尚且つ私たちが一緒に、そのような思いを、全ての人が共有できるような社会をつくるために、「二歩」を踏み出していきたいと願っています。

**増田** 今日はお二人のお話を伺っていて、一貫して、テラ・ルネッサンスらしさを考え、丁寧に、現地の支援活動や、組織運営の中で具現化しようとしていることが、現在のテラ・ルネッサンスの組織や活動の成長、受益者や社会に対する貢献につながっていると感じました。鬼丸さんがいつも講演で仰っている「私たちは微力ではあるけれども、無力ではない」という言葉を、テラ・ルネッサンス自体が体現している感じがするんですね。ここで働く一人一人が、丁寧にテラ・ルネッサンスらしさを追求することで、テラ・ルネッサンス全体の成長に、ひいては社会の変革につながっていくのだと確信しました。そして次のステージへの可能性も感じ、私も勇気をいただきました。

テラ・ルネッサンスの活動地域

- コンゴ民主共和国
- ラオス人民民主共和国
- ウガンダ共和国
- 日本
- カンボジア王国



マニフェスト平均達成度

75%



Terra Renaissance Manifesto  
 2010 - 2012

1. 10,000人の紛争で傷ついた人々を支援します(支援)
2. 100,000人の「平和の担い手」を育成します(育成)
3. 1,000,000人の平和に関心を持つ人を増やします(啓発)

今から3年前、テラ・ルネッサンスが設立10周年（NPO法人化5周年）を迎えるにあたって、これまでの活動を振り返るとともに、今後の中長期目標や組織としてのあり方について、理事・職員間でいろいろと話し合いをしました。そして、3年以内にどんなことができるか、それが達成できた時、そこには、どんな世界（社会）が広がっているのかをイメージしながら、具体的な達成目標（マニフェスト）を策定しました。

その後、カンボジア、ラオス、ウガンダ、コンゴ民主共和国など海外での支援事業とともに、国内での啓発活動やキャンペーン、政策提言など、私たちのめざす社会の実現に向けて様々な活動を続けてきました。

今回の「結晶母」では、この3年前に策定したマニフェストが、一体ど

れだけ達成できたのか、また、そのプロセスや結果について、各担当者がどのように考えているのかを、これまでご支援いただいた皆様方と共有できればと考えています。

私たちは、一つの事業や活動がどんな効果を社会にもたらすのかを考える時、さまざまな視点から評価する必要があると思っています。その際に最も大切にしていくことは、設立目的でもある「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」へどれだけ貢献できているかどうかという基準です。

この基準に照らしてすべての活動を評価し、修正すべき点は修正し、効果的な活動は大いに発展させる「活動の選択」をしていくことが大切だと思っています。

これからも、テラ・ルネッサンスを支えてくださる支援者の皆様とともに、設立目的の実現に向けて歩み続けながら、これから生まれてくる子どもたちがよりよい社会に生きることができるよう、しなやかに社会変革の風を巻き起こしていきたいと願っています。

# 傷ついた人を支援します

# 10,000人の紛争で

支援

## アフリカを変える5つの行動目標

### 1. 達成度 46%

ウガンダ北部で、元子ども兵160名の社会復帰を実現します。

2010年以降、93名への元子ども兵を受け入れ、内73名が社会復帰し、残りの20名が現在社会復帰の訓練中です。(事業開始からの累計では169名を受け入れ、149名の社会復帰が完了)。

### 2. 達成度 63%

ウガンダ北部で、元子ども兵の住む地域の貧しい人々200名の収入向上を促進することで、元子ども兵と地域社会の和解を促します。

元子ども兵の住む地域の最貧困層125名への職業訓練、または収入向上支援を行い、両者の和解を促進しました。結果、149名の元子ども兵の96%が地域住民との相互扶助活動を行えるようになっています。

### 3. 達成度 50%

コンゴ(民)で、元子ども兵と紛争の影響を受ける人々2000名のBHN(衣食住など人間としての基本的ニーズ)を満たし、紛争後に向けた生活を再建します。

元子ども兵の住む地域の最貧困層125名への職業訓練、または収入向上支援を行い、両者の和解を促進しました。結果、149名の元子ども兵の96%が地域住民との相互扶助活動を行えるようになっています。

### 4. 達成度 100%

コンゴ(民)で、2000名にマラリア予防のための蚊帳を配布します。

コンゴ東部南キブ州にて600家族(約2700名)全世界帯に蚊帳を直接配布することができました。

### 5. 達成度 100%

活動地域において、不法な小型武器取引の規制を推進する啓発活動を実施します

ウガンダにて毎年、不法小型武器問題に関する啓発イベントを現地NGOと協力して行うことができました。また、国内での啓発活動や国連会議への出席を通して武器取引規制を積極的に働きかけてきました。結果、2013年4月2日、ATTが国連会議で採択されました。

※マニフェスト01は、P26に続きます。



ウガンダの元子ども兵社会復帰支援センター。

### 活動の成果を共有することが大切

**川島** このマニフェストの中で主に小川さんはどんな活動に関わっていましたか？

**小川** 主に海外での支援事業、特にウガンダとコンゴ民主共和国(以下、コンゴと表記)の事業に関わっていました。

**川島** アフリカと聞くとなんとなく遠い場所のように感じますが、実際にアフリカで活動しているのはどこの国や地域の団体が多いのですか？

**小川** 歴史的な経緯も関係してありますが、やはり欧米の援助機関が圧倒的に多いですね。ウガンダでは、イギリスに加えて北欧などヨーロッパ地域を拠点にした団体、コンゴならフランスやベルギーの団体が多いです。一方、ウガンダ北部やコンゴ東部に拠点を置いている日本の団体(NGO)はほとんどありません。

**川島** やはり植民地期の影響というものが今も残っているんですね。その後、両国では長期の紛争

を経験していますが、今回のマニフェストを作った頃はどのような状況だったのですか？

**小川** ウガンダは、ようやく政府主導の復興計画が始まった頃でした。なので、私が駐在し始めた2005年頃とは見違える程、治安もよくなっていました。以前は人口の約9割が避難生活を送っていたのですが、その避難民のほとんどが村々へ帰還していました。

一方、コンゴ(東部地域)では、武装勢力の襲撃が続いている状態で、治安も悪く、現地の人々は避難を繰り返さざるを得ない状況でした。以降、紛争解決に向けた取り組みは続いています。今も基本的にその状況は変わっていません。

**川島** なるほど。ウガンダは状況が大きく変化している時期だったのですね。そんな中で、作成したマニフェストでは、具体的な数値目標を意識しているように思うのですが、それは客観的な成果を支援者の方々に見えるようにしたかったからですか？

**小川** そうですね。私たちは質と量の両方が大事だと考えていま



小川 真吾 (おがわしんご)

大学卒業後、青年海外協力隊員としてハンガリーに派遣、旧ユーゴ諸国とのスポーツを通じた平和親善活動などに取り組む。帰国後、カナダ留学などを経て2005年より、テラ・ルネッサンス、ウガンダ駐在代表。ウガンダ及びコンゴ民主共和国における元子ども兵の社会復帰支援事業などに従事し、2011年テラ・ルネッサンス理事長に就任。



川島 綾香 (かわしまあやか)

高校の修学旅行で出会った青年海外協力隊員と世界史の授業をきっかけに、国際協力に関心を持つ。大学では、主に平和学や音楽について学んでいる。将来は戦争をなくすための働きをしたい。2013年9月インターン開始、めぐるプロジェクト担当。



(中) コンゴ事務所の現地スタッフとのミーティング風景。  
どのような支援が効果的かを話し合う。  
(左) コンゴでのフィールドワークの様子。  
道路状態が悪くしばしば車両がスタックする。

すが、数量的な評価は不可欠だと思っています。現場で活動しているスタッフや職員、インターン生は日々の活動からある程度、その成果を肌で感じる事ができるかもしれません。それが、それでは多くの私たちの活動を支える方々には十分な説明ができません。ですので、明確な数値目標を立てて、それがどれだけ達成できたかを多くの支援者のみなさんと共有したいと思っていました。

**川島** しかし、数値目標を達成することだけを考えると、支援の現場では、どうしても質的なものを犠牲にしてしまうようにも思うのですが、量的な評価だけに囚われないように何か気をつけていたことはありますか？

「数値目標」は支援を受ける側が実感しなければ意味が無い

**小川** 「何のための数値目標か？」を常に意識して活動してました。ちなみに、川島さんは何のための数値目標だと思いますか？

**小川** 実際に、援助する側が数値目標を達成して満足していても、援助を受ける側が全く満足していないということはよくあることなのです。

としても、実際には支援が貧しい人々に行き届かないことはよくあることですし、仮に届いたとしても、中長期的に貧困を減らすことにつながるかどうかはわかりません。

つまり、援助する側は、「1億円の食糧援助」さえすれば、「貧困を減らす」という最終的な目標につながるだろう、と考えるわけです。しかし、実際には「こうすれば、ああなるだろう」という援助する側の論理(理論)と、現実との間には大きなギャップがあるわけです。このギャップをいかに小さくしていくかが、援助の「質」を高めるということなのです。

**川島** なるほど。そうしないと、数値目標だけが独り歩きして、気がついてみたら、あれだけ支援したのに、一向に人々の生活は良くなっていない、ということになってしまいますよね。

**小川** まさに、今の援助の問題点はそこに起因していると思います。だからこそ、ひとり一人の人間に焦点を当てた、きめ細かい支援が大事になってくるということです。

いオーダーメイド型の支援をしながら、量的な数値目標を達成していく際に大事にしなければならぬ点は、何でしょうか？

「段取りよく  
計画を進めること」と、  
「柔軟に対応していくこと」  
のバランスが大切

**小川** ひとつはバランスをとるということです。ひとり一人の状況に合わせて支援をしていくためには、当然、スタッフもそれ相応に時間を割かなければいけませんし、計画通りにすすまないことも多々出てきます。しかし、プロジェクトというのは、限られた資金と人員で、一定期間に、一定の成果を出すことが求められるわけです。ですので、計画したことを段取りよく進めていく視点と、ひとり一人の状況に柔軟に対応していく視点のバランスをとることがとても重要な点です。

**川島** そのバランスをとることはとても難しいと感じます。判断に迷うこともあったのではないかと

と思うのですが、何を基準にそのバランスをとっていたのですか？

**小川** これはあらゆる判断をする時に大事にしていることですが、「自分たちの目指すビジョンは何なのか」ということを判断基準にしています。テラ・ルネッサンスの最終的なビジョンは、「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」ですよ。では、そこにつながるためには、今、この場所でのこの事業の、この作業について、どのように判断していけばいいのか、と考えるわけです。迷ったときは、必ず、この原理原則を思い起こすようにしています。

たとえば、コンゴ事業では、治安が悪くなった時に多くの受益者が農業を一時中断して避難せざるを得ない時期が何度もありました。そんな時は、ひとり一人の自立に向けた職業訓練などに時間を費やすことよりも、避難者の直接的な支援を効率的にすることを優先してスタッフには動いてもらいました。村が襲撃されて、怪我をしたら、殺害されるなどということになれば、将来の自立どころの話で

はなくなってしまうから。また、ウガンダでは、治安も安定して、ひとり一人の自立支援をよりきめ細かく行うことができていますが、一年に1度か2度くらいは、事業を運営していくための資金がショートしてしまうかもしれないという危機がありました。そんな時は、現地スタッフにも日常業務を短縮して、資金を調達するために必要な資料の作成準備などを優先してやってもらいました。いくら質の高い支援活動を行っていると、言っても、その活動資金がショートしてしまえば、プロジェクト自体がストップしてしまう、つまり、元子ども兵が安心して生活するための支援活動を中断せざるを得ない、という最悪の事態になってしまうから。

常に、自分たちが何を目指しているのか、という視点を忘れずに、一つ一つの事業や作業において、何を優先すべきかを判断してきたということ。川島 なるほど。そういう意味では、日本の事務所でも活動する私たちインターン生も同じような課



(右ページ上)ウガンダの元子ども兵たち。職業技術を身につけて、これから自分の力で収入を得ようとしていた頃。自らが選択した未来を切り開こうとしている。

(左ページ上)服飾デザインの技術を既に身につけた元子ども兵(第3期生)から学ぶ、元子ども兵

(左ページ下)ウガンダでの元子ども兵のリハビリ施設で聞き取り調査を行う鬼丸と小川



とを考えれば、合理的な判断だったとは言えないかもしれません。

**川島** こちらがよかれと思ってアドバイスしても、本人がそう思わないと主張した時にどう判断するかは確かに難しいですね。

**小川** 特に、元子ども兵の場合、最初の頃は自分の意思で、「これをやる、あれをやる」となかなか言えない状況にあるので、それが徐々に、自分の夢ややりたい事を具体的に語り始め、それに向けて前向きに努力し始めるんじゃないですか。そうすると、本人の判断が、こちらから見れば、「ベストではない」と思うことがある一方、ここまで自分の将来をはっきりと主張できるようになったことに、とても価値があると考えてしまうんです。

**川島** なので、本人の意思決定を尊重することにも意味があるんです？

**小川** そうなんです。どんな理由であろうと、本人の意思決定には何か意味があるのではないかと、よく感じていました。本人がそれを合理的に説明できなくても、長い目で見れば、そこに何か価値があるのではないかと。

たとえば、ある元少女兵は、HIVに感染していて、自分の栄養をしっかりと蓄えることが重要であるにもかかわらず、得た収入のほとんどを自分の子どもの靴やカバンを買ったりすることにお金を使っていました。これは、彼女の健康を考えればよくないことなので、まずは自分の健康管理をしっかりするようにと常に話していました。しかし、彼女と話していたわかったことは、子どものための仕事をして、稼いだお金で何か買ってあげることが彼女にとっての一番の生きがいになっていて、生きる希望になっていたということです。

**川島** なるほど、結局、そこもバランスが大事ということでしょうか？

**小川** そう思います。ひとり一人の意思決定や自発性を尊重していくと、決まった期間に、数値目標を効率的に達成することとトレードオフ(一方を得れば他方を失う)の関係になってしまうことも実際にあります。

ですので、今後の課題としては、このような数字に現れない価値を、



題を抱えているということですよ。日々の業務で何を優先するか、どこまできめ細かく対応するか、いかに効率よくテキパキと作業するかなど。

では、マニフェストを達成する際に悩んだことや、今後の課題だと感じていることは何ですか？

**支援を受ける人たちの自発性をどこまで尊重できるか**

**小川** さきほどの話ともつながるかもしれませんが、全体のバランスを考えて、どこまで、支援を受けている人たちのオーナーシップや主体的な意思決定を尊重できるかという点です。

テラ・ルネッサンスの現場支援では、アフリカの元子ども兵であれ、カンボジアの最貧困層の住民であれ、それぞれの欠けている部分だけに目を向けるのではなく、ひとり一人に内在している力や可能性に着目します。そして、その力が「内的発的」に発揮されることを最も大切にしています。つまり、本人の

意思決定を尊重するということです。そうすると、当然、個人個人によつてその力が発揮されるプロセスは多様ですし、こちらがコントロールできるものではありません。そんな中で、受益者が思いもしない選択(意思決定)をすることもあるわけです。たとえば、ウガンダで1年半かけて、木工大工の訓練を修了して、それを仕事にして収入を得る計画を立てていた元少年兵が、木工用具も買い揃えて、開店準備も整った直後に、「やっぱり、木工大工のお店は開設したくない」と急に言ってきたことがありました。特に技術が不十分であるわけでもなく、家族に反対されたわけでもなく、つい一週間前にはやる気満々だったにもかかわらず、です。

理由を聞くと「(兵士時代に被弾した)背中が傷跡が心配だから」と言うわけです。しかし、障害が残っているわけでもなく、つい先日までハードな木工大工の作業も難なくこなしていた、医者の診断でも全く問題ない…。いろいろな話を聞くと、「やっぱり、自信がないの

で、小売店をしたい」ということでした。

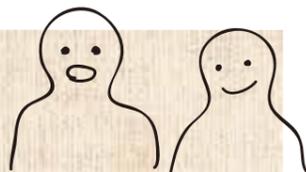
そんな時、川島さんなら、どう判断しますか？

**川島** うーん。難しいですね。十分な力や能力があっても本人がそれを尊重すべきたとも思いますが、すべての準備も整っているわけですし。多分、彼が実際に収入を得て、社会復帰するためにはどちらがいいかという視点で決めるのがいいのかなと思います。

**小川** 客観的に見れば、木工大工をするほうが彼の生活再建にとつて有利なのは間違いないと私も現地スタッフも思っていました。なので、木工大工のほうが本人にとつてメリットがあると説得しようかと思つたのですが、いろいろ悩んだ挙句、結局、彼の意思を尊重して、木工大工ではなく、彼には、小売業を始めたらうことにしました。結果、収入は思つたほど上がりませんでした。本人は「楽しい」と話していました。

マニフェストで掲げた、社会復帰(経済的な自立など)を達成するこ

支援者さまの声



## 「globe 基金は、ウガンダ・コンゴの平和に向けたプロジェクトを支援しています」

「ハイウェイの先に子どもたちがいます。あなたは、アクセルを踏み続けますか？」  
1992年、地球サミットのモーリス・ストロング事務局長の言葉です。  
ここが「globe 基金」の原点となり、子どもたちに美しい地球を残すため、  
1997年6月1日株式会社アイケイの中に「globe 基金」が設立されました。  
2006年までの9年間は、環境教育を行う器として、  
東南アジアを中心に「globe スクール」を8校建設してまいりましたが、  
テラ・ルネッサンスとの出会いによって、  
「globe 基金」は平和活動へと方向転換をしました。

平和活動へと舵を切ったのは、今、正に目の前に手を差し伸べなければならないウガンダ・コンゴの子ども兵たちがいたからです。

精神がズタズタになった子どもたちのメンタルヘルスを支える器として、

「globe ハウス」の建設を思い立ちました。

2006年に「globe ハウスI」をウガンダに、

2007年もウガンダに「globe ハウスII」を、

2009年には「globe ハウスIII」をコンゴに建設してまいりました。

全てのオペレーションは、テラ・ルネッサンスが行ってくれています。

そして来年は、立ち直った子どもたちの生活基盤を支えるために、

コンゴに「globe ファーム」を開設します。

コンゴの原野を開墾して食糧を自給し、

可能であれば市場へ出荷できるようになるまで

「globe ファーム」を育てていきたいと思えます。

テラ・ルネッサンスの皆さん、よろしくお願いします！



globe 基金代表  
飯田 裕 さん  
(株式会社アイケイ代表取締役社長)

(上) グローブ基金により建設された、コンゴ民主共和国の活動拠点「グローブハウスIII」。紛争被害女性への洋裁訓練の修了式。  
(下) グローブ基金を支える(株)アイケイの社員の皆様



1年半の社会復帰の訓練を完了し、式典で木工大工の用具を受け取る元子ども兵(右端)とウガンダ事務所職員(左端)。彼を受け入れて共に生活をする叔父も式典に参加(中央)

いかにして「見える化」していくかだと思っています。つまり、収入額や地域住民との関係がどれだけ良くなったかによって目標(社会復帰)の達成度を測るのではなく、そのプロセスにおいても、ひとり一人の主体的な意思決定を尊重することにどんな意味があるのかを、客観的に評価できるようにしていくということです。

**川島** なるほど。私自身も今日までは、最後に何かあれば、一言お願いします。

**小川** このマニフェストの結果は、支援者の方々やインターン生、ボランティアの皆様と共に実現できたものだということです。私たちの活動に関心を持ってくださる方がいなければ、資金も集まりませんし、こうして共に働いてくれるインターン生たちも集まっています。本当に様々な方々が、それぞれの思いから、アフリカやアジアの平和に関心を寄せてくださったおかげだと思っています。これから、共に「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」という、



私たちのビジョンに向けて歩いていっていただけることを心より願っています。

**川島** ありがとうございます。私も自分に出ることを続けていきたいと思っています。

**小川** こちらこそ、長時間、話を聞いてくれてありがとうございます。

# 10,000人の紛争で

# 傷ついた人を支援します



江角 泰 (えづみ たい)

大学在学中、テラ・ルネッサンスのカンボジア・スタディツアーに参加。京都で大学院に通いながら、2年間テラ・ルネッサンスでインターンを経験。2006年に職員となり、2008年よりカンボジアに駐在。カンボジア及びラオス事業の運営に携わる。カンボジア駐在代表。

牧野 由起子 (まきの ゆきこ)

大阪府出身。専門学校を卒業後、速記者として働く中で、まちづくりやNPO活動に関心を持つようになる。2002年、仕事を辞めて大学に進学。大学卒業後、海外からの研修生を受け入れているNGOでの住み込みボランティアを経て、2008年よりテラ・ルネッサンスに勤務。2011年10月から2013年1月まで、岩手にて東日本大震災復興支援事業に携わる。現在、京都事務局勤務。



一方、国際社会の状況は、カンボジアの地雷という問題に関して、ほとんど関心が薄れていっている時期でした。その理由の一つとして、2008年からの経済危機があつて、

僕たちが活動していた村では、地雷がまだ人々の生活圏内に残り、電気もなく、道も整備されていないくて、取り残されている感じがありました。

江角 カンボジアに関しては、2010年というと、1991年パリ和平協定から19年、元ポル・ポト派が政府に統合されて12年くらいたつたときで、開発が進み始めてきているときでした。しかし、

カンボジアでもその影響をまろに受けていた部分がありました。ラオスに関しては、今もそうなんですけど、ほとんど知られていないというのと、不発弾の問題の状況はほとんど変わっていないので、どこにでも不発弾が落ちていっている状況がありました。

江角 事業をやるためにはお金が必要で、お金を集めるためには関心を持ってもらわないといけないんです。特にラオスの場合は、ここ2年くらい、ほとんど何も動かすことができませんでした。昨年、ラオスのスタディツアーを計画したときにわかつたんですが、ほとんどの人がラオスの不発弾問題について知らなかったり、関心がな

牧野 マニフェストの中で、江角さんは主にどこの分野に関わってききましたか？

江角 「支援」「育成」「啓発」のうち、特に「支援」の中で、カンボジアとラオスでかわっていました。

牧野 マニフェストを始めた2010年の状況はどのようなものでしたか？

## 薄れる関心の中の取り組み

### 9. 達成度 100%

カンボジア、ラオスで、安全が確保された土地に学校を建設し、1500名の子どもたちに教育の機会を提供します

カンボジア、ラオスの地雷、クラスター爆弾の不発弾埋設地域において、安全が確保された土地に4校の小・中学校を建設し、地雷埋設地域の小学校に不足していた机、椅子の提供、教員用宿舍の建設、及び小学校の修理を行い、結果、1820名の子どもたちに教育の機会を提供しました。(ラオス・プレマ・シャンティ中学校500人、穂高小学校250人、オウ・チェット・プラム村小学校230人、プオ・ソククリア村小学校230人、ロカブス村教員用宿舍建設180人、プレア・ブット村小学校修理210人、オッチョンボック村小学校への机、椅子の提供220人)

### 10. 達成度 90%

カンボジア、ラオスで、地雷・不発弾回避教育のための教材を5000部作成・配布します

地雷・不発弾回避教育のための教材を4500部作成し、配布しました。

### 6. 達成度 6%

カンボジアで、地雷除去支援を行い、1000世帯の安全を確保します

2012年には、地雷除去団体MAGの新しい機械「タント」チームの運営費を提供し、2013年9月までに、カンボジアでも最も地雷被害のひどい地域のひとつであるバタンバン州ラタナック・モンドル郡と、パイリン特別市サラ・クラウ郡で163,471㎡の除去に貢献しています。結果、テラ・ルネッサンスの支援による地雷除去活動の受益者数は306名、世帯数は64世帯でした。そして、カンボジアの地雷&不発弾被害者数は、2010年286名、2011年211名、2012年186名と確実に減少しています。

### 7. 達成度 87%

カンボジアで、地雷埋設地域300世帯の自立を促進します

地雷埋設地域の262世帯(ロカブス村80世帯、プレア・ブット村80世帯、オッチョンボック村102世帯)の自立支援を行うことができました。

### 8. 達成度 0%

ラオスで、不発弾処理支援を行い、1000世帯の安全を確保します

ラオスでの不発弾処理費用は、この期間には提供できませんでした。2013年、水道建設を実施する予定地のシエンクアン県バハーン村での不発弾除去費用を不発弾除去団体UXO-Laoへ提供しました。不発弾除去後の土地は、学校や水道建設など現地のコミュニティに必要な不可欠なインフラのために利用されています。

支援

# アジアを変える5つの行動目標

生活がよくなっていないと勝手に思い込んでしまい、それで仲が悪くなってしまう。一人の人は畑で野菜をつくっていたんですが、もう少しで野菜が収穫できるというときに、もう一人の地雷被害者の人がその野菜を切ったりとか、そういうようなことがあったんです。

そんなことがあって、住民組織のリーダーの人たちも近づきたくない。僕たちは余り刺激をしないようにしながら、それでもこれまで通り普通に調査をして、話を聞いたり、状況を聞いたりということが続けていました。今2年くらい経ちましたが、先日その人のところに行ったら、様子が大変変わっていたんです。

その人は前より落ち着いてきていて、「私は本当に悪い人だった」と言っただけです。ほかの村の人たち、近所の人たちに、自分はいろいろとひどいことをやってきてしまったけれど、今は、近所の子どもたちが遊びに来たら自分の庭の果物をあげるし、子どもたちも自分になつていくれている。自分は、お金が欲しくて、自分のことだけを

考えて生活をしてきたけれども、それじゃだめだというのがわかった。

何でそんなふうになったのかと聞いていたら、その人はキリスト教に入ったんですね。その村でキリスト教の教会を建てる土地をその人が提供した。最初、恐らくその人は、自分に支援をしてもらえる、自分にメリットがあるだろうというところで土地を提供したんだろうと思いますが、キリスト教の教会へ行っている話を聞いたときに、自分は間違っていたというのがわかった。今は、ほかの地雷被害者の人たちとの関係も修復されて、普通に村の人たちとも協力して生活できるようになつていて、すごくよかつたなと思つています。

住民組織を運営していく上で、協力しようとしないうる人たちがいると、なかなかうまくいかなかったりするので、どういうふうな形で運営していくのか、住民組織のリーダーの人たちもすごく難しかったと思います。ただ、地雷被害者の人たちの精神状態というのは不安

な場合が多いので、一時的な、たまたま調査したときの状態だけで判断するというのはよくなくて、やはり継続して何年もかけて、ゆっくりゆっくり、収入向上の支援であつたり、いろいろなことをやっていかなければいけないというのが、その事例からよくわかりました。

**絵本が好きな子どもたち**

**牧野** 建設した小学校には図書室がありましたよ。

**江角** カンボジアでは、どこかのNGOなどがサポートをしない限り、図書室は普通の小学校にはほとんどありません。僕たちが支援していた小学校もやっぱりなかったの、本を読んだことがない子どもたちがほとんどでした。図書室ができるまでは、休み時間になつたら、子どもたちの多くは外で遊んでいたのが、図書室を設置したら、本を読む子どもたちも出てきた。子どもたちはすごく好きですね、ストーリーを読むのが。特に絵本が好きで、よく読んでい

ます。

日本から支援をもらった本が幾つかあつて、コミュニティ時津さん、地雷ゼロ宮崎さん、ナガサキピースミュージアムさんから最初に送ってもらったんですけど、その本に関しては、クメール語にして図書室に送っています。それだけじゃなくて、今カンボジアでも随分たくさんクメール語の本が出てきて、子ども向けの本とかも結構あるので、カンボジアの本もサポートしてもらって、図書室の中に入れてもしています。

外務省のお金で建てたブオ・ソングリア村の小学校には司書がいて、図書室を管理してくれているんですが、すごくよくやってくれています。休み時間とか、授業をやる先生たちが忙しいときに、本の読み聞かせをしたりしてくれています。ただ、今月初めの洪水で、かなり本が濡れてしまったみたいなんです。教室の机の上に本を避難させていたそうなんです。今日現任(※インタビュー時点は2013年10月30日)、現地に行っていない



(左)自宅で洋服店を開いている様子 (右)カンボジア事務所の場合と活動地域

かつたりしたので、そういった部分が一番大きかったと思います。

**顔の見える関係づくり**

**江角** 支援者の人たちとの関係に關していえば、既存の支援者の人たちとの関係を見直してきたところがあります。古くからの知り合いの人たち、地雷ゼロ宮崎さん、コミュニティ時津さん、穂高住販さんやトータルハウジングさん、そういった人たちとの関係をできるだけつなげる。定期的にコンタクトをとって、できれば日本に帰ってきたときには会いに行つて、報告をして、顔の見える関係をつくる。そうすることによって、小学校の運営であつたり、地雷埋設地域の村落開発支援を継続する上で、大きな支援をしていただいたと思います。

**牧野** その他、何か苦労したことはありますか？

**江角** 苦労はたくさんいろいろあります。

例えば、村落開発支援プロジェクトの中の基礎教育支援活動、小

学校の建設を取り上げても、学校を建てたら、それで終わりかという、そうではありません。自分たちで建てた学校は、もちろんその後定期的に行つて状況を見ていくんですけど、学校があつても、授業がされていなかったり、子どもたちがなかなか学校に来られなかったりといったことがあります。そこで、村の状況に応じて、その後フォローを行っています。ある村では、先生たちの給料が安く生活できないので、先生たちの宿舎を建てたり、あるいは、子どもたちが学校になかなか来られないというので、村の貧困層の人たちに対して、裁縫の技術訓練や養豚などの収入向上支援を行つたりしています。ただ、本当に貧しくて、食べるものがなくて、仕事がない人たちは、農作物の収穫などの単純労働で日当をもらえる仕事がたくさんあるタイに出稼ぎに行つてしまいます。そうされると、正直どうしようもありません。サポートしようにも、サポートできないことになつてしまいます。

**牧野** 問題は複雑なんですね。

**継続することが大切**

**江角** また、こんなことがありました。

地雷被害者の人たちのサポートを最初に始めたのがオツチョンボック村で、どういうサポートがいいのかというので調査に行つたんですが、なかなか支援を始められなかったんです。それというのも、地雷被害者の人たちの中に、僕たちが調査だけをして、自分たちでお金を使つてしまつていたりとか、住民組織のリーダーの人たちにはサポートをするけれども、自分たちには支援をもらえないんじゃないかというように感じて疑つていた人たちがいました。後に、そうした地雷被害者の人たちとの関係は修復されたんですが、ただ、地雷被害者の人たちの中に精神的に不安定な人がいました。

僕たちがサポートを始めたころ、お互い近所に住んでいて、仲のよかつた地雷被害者の人たちがいたんですが、一人の人が、もう一人の人にはすごく支援が行つたり、生活がよくなつていのに、自分は

ので、状況がまだわからないんですが、電話で話をしている、かなり本は傷んだんじゃないかと思えます。それと、司書さんと保育園の先生たちの給料はこちらで払っているんですが、現地に行っていないので、給料が払えていないんです。早く現地に行つて、払ってあげなければと思つているところです。

**事務所の前から始めたゴミ拾い**

**牧野** カンボジアではゴミがあちこちに捨てられていて、そんな中、現地スタッフの人が自発的にゴミ拾いを始めたと聞いたのですが。

**江角** サポートしているところは、かなり僻地のほうであるんですが、そういうところでゴミがすごく散乱をしています。カンボジアでは伝統的に、ゴミになるようなものがあつても、自然のものを使つていたので、捨てても土に返つていくという生活をやってきたところですが、今、お菓子の袋であつ

たり、ナイロンの袋であつたり、プラスチックの製品が入つてきて、そういうものをこれまでと同じように捨てているので、すごくゴミがいつばいある。これをそのままにしておくわけにもいかないしというので、ゴミ拾いを小学校とかでもやっていたんですけど、なかなか定着しなかった。というのも、現地のスタッフの人たちも、ゴミを普通にポイ捨てしていたんです。そういった人たちが、学校に行つて「ゴミを捨てるな」と言つても説得力がないですね。自分たちが変わらないで、子どもたちに言つても変わらないし、村の人たちに言つても変わらない。

そこで、カンボジアの事務所では毎朝掃除をしていたんですが、事務所の中だけでなく、事務所の前の通りに落ちていたゴミをまずは拾おうというので始めたんです。毎日それをやっているうちに、現地のスタッフの人たちもやるようになった。最初はゴミがいつばいあつて、一時間拾つてもまだまだいつばいで、きりがいいような状況だったのが、しばらく続ける

うちに、量も少なくなつて、短時間で拾えるくらいになった。

その後、僕は何も言わなかったんですけど、現地のスタッフたちが自分から、「このあたりはある程度きれいになつたから、村の小学校に行つて、子どもたちと一緒にゴミ拾いをしようと思う」と言ってくれたんです。それで、自分たちが小学校を建てたところと、村落開発支援をやっている村の小学校のところにいた子どもたちとゴミ拾いをやつたんです。すごくゴミが出たんですけど、田舎のほうの子どもは純粋で、大人たちがゴミを拾っているのを見たら真似をする。したがって、子どもたちもゴミを拾うという感じで、小学校のほうはきれいになつたんです。

この事例は、自分たちが最初に変わらないと、変えることはできないということが、すごくよくわかる事例でした。

**牧野** カンボジアの人には、ゴミがたくさん落ちていたら汚いといった意識はないのでしょうか。

**江角** ゴミに対する意識ということでは、田舎のほうと町の中で

は少し違う気がしています。

首都のプノンペン郊外には、スタン・ミンチャイというプノンペンから出るゴミが捨てられるゴミ捨て場がありました。ここには、十年前から毎年スタディ・ツアーで訪問してきたのですが、このゴミ捨て場は、ゴミの山になつていて、そこにはリサイクルできるものを探す貧困層の人たちが、スカベンジャー（ゴミやくずを拾い集めて生活する人）としてたくさん生活していました。それで有名だった場所ですが、数年前に満杯となり、新しいゴミ捨て場に移り、閉鎖されたんですが、ゴミの山ができるのは、つまり、ゴミを収集する仕組みがうまく整っているからなんです。なので、プノンペンは、通りや町、市場でもゴミはあまり落ちていませんし、捨てる人も少なくなつています。ところが農村では、プラスチックなどのなかなか分解されないものも、今まで使ってきた自然のゴミと同じように家の周りや通りに捨てるので、ゴミだらけになつていました。

農村でも、ゴミがたたくさん落ち

ていけば汚いという意識はあると思います。ただ、汚いから拾おうというふうにはならなかった。というのは、拾つてもお金にならないし、それで自分たちの生活がよくなることにはつながらないので。落ちていても、自分たちの生活には関係ない、悪影響がないだろうし、というところだったと思えます。ただ一回、きれいなところ、ゴミが落ちていないところを経験すると、落ちているところを見れば汚いな、ゴミがこんなに散乱しているんだな、そういう思いを持つ人たちは少し出てきたと思います。

小さいときから、掃除をやつたり、ゴミを拾つたり、整理整頓したりとか、経験のない人たちがカンボジアは多かつたと思うんです。長い内戦だったり、混乱していた状況があつたので、それはしようがないと思うんですけど。ただ、今いろいろなものが入つてきて、整理整頓したり、きれいに清掃したりする必要が出ていて、それを認識するためには、小さい子どもが重要ながしています。

**数字にあらわれない部分を見つめる**

**牧野** この結果に対してどのような思いますか。満足していますか？

**江角** 数字的には、できたところ、できなかったところがあるんですけど、達成できたところは素直にうれしいと思つています。一方で、数字にあらわれない部分、例えば、数字的には達成できているけれども、質の部分ということで見れば、もつともつと向上させることができるだろうなというところがたくさんありましたし、逆に、数値的には少なくても、達成できていないけれど、一人一人、世帯世帯の状況を大きく変えることができたかなというものもあります。

今後は、今回数字としてあらわれなかった部分で、もつと厳しい状況の人たちがたくさんいて、例えばタイへ出稼ぎに行つて何年も戻ってきていない人など、そういうところにとだけアプローチしていくかというのを考えないといけないと思つているところです。



**牧野** 最後に、支援者の皆様へのメッセージを聞かせてください。

**江角** カンボジアの場合は、日本だけじゃなくて、世界的にも地雷の問題に関心が少なくなつてい中で、継続して支援してもらつたですし、そうした支援によつて、こういう結果を出すことができた。もしそれがなければ、こういう結果を出すことはできなかった。そのことはすごく感謝しています。ラオスのほうは、自分の力不足もあつて、ラオスの状況を伝えることがなかなかできなかったのですが、まだまだ注目されていないし、知られていない状況があります。特にラオスのほうは、今後ぜひまた支援してもらえたらうれしいなと思つています。

1,000,000人の平和に関心を持つ人を増やします

100,000人の「平和の担い手」を育成します

6. 達成度 34%

気軽な国際協力的手段として、使用済みインクカートリッジ、書き損じハガキの回収拠点、募金箱設置個所を1,000カ所に増やします

募金箱75カ所、インクやハガキ回収拠点63カ所、計138カ所を増やしました。全国各地での入り口をつくるべく、インターン、ボランティアとともにこれからも広報を行っていきます。

7. 達成度 100%

CSR調達、ISO26000の普及にむけ、企業・団体に積極的な働きかけを行います

2010年より計3回、企業と、平和構築分野における企業の役割を考える学習会を開催し、CSRについて意見交換を行いました。

8. 達成度 100%

日本国内で不法な小型武器取引規制を求めるキャンペーンを行います

講演活動を通して、一般市民への啓発を行い、当会も国連会議に出席し、積極的にアピールしました。結果、2013年4月2日、ATTが国連会議で採択されました。

9. 達成度 100%

ウェブサイト上での決済手段を導入し、より寄付のしやすい条件整備を進めます

ウェブサイト上での決済手段を導入しました。

10. 達成度 0%

認定NPO法人格を取得し、より寄付のしやすい条件整備を進めます

2011年に顧客管理システムを導入し、認定NPO法人格を取得するためのデータ整理を行いました。2013年度内に申請を行う予定です。

1. 達成度 68%

職員、インターン、ボランティアによる講演を、全国各地で500回実施し、50,000人に平和の大切さについて伝えていきます

職員、インターンによる講演を338回行い、主催イベントは計42回行いました。外部イベントへの参加は25回に及びます。そのような機会を通して、述べ38,400人の方に平和の大切さについて伝えることができました。

2. 達成度 100%

各種教育機関よりインターンを200名受け入れ、平和の担い手を育成します

3年間計120件のメディアに掲載され、課題や活動を広報しました。またSNSの発展により、主にFacebookを活用し、広報に努めました。

3. 達成度 100%

携帯電話サイト、動画サイトを作成し、より「分かりやすい」啓発に努めます

計27本の動画を制作し、無料動画投稿サイトへ掲載、またその中のいくつかの映像を切り取り、動画サイトを作成し、分かりやすい啓発に努めました。携帯電話サイトは、スマートフォンの発展により、本体サイトの更新(修正)を通して、スマートフォンで分かりやすく表示されるように、取り組みました。

4. 達成度 100%

支援実績を基に、子ども兵や地雷・クラスター爆弾、小型武器に関する小冊子・DVDなどを作成します

2011年度に子ども兵啓発DVD「250,000〜子ども兵が見た夢〜」を制作。1000枚を支援者や教育機関へ配布しました。2013年12月にはクラスター爆弾に関する小冊子が完成する予定です。

5. 達成度 25%

テラ・ルネッサンスの活動、取り組み課題について伝える写真展を100カ所で開催します

25カ所でパネル展を開催し、当会が取り組む課題、活動を写真を通して、伝えました。よりたくさんの方に見てもらえるように、内容を更新し、これからも貸し出しを行う予定です。



6. 達成度 20%

全国各地に1000名のボランティア登録者を募り、テラ・ルネッサンスを応援する地域リーダーを50名育成します

ボランティアメーリングリストへの登録は約300名、各地域で動いてくださるリーダーは10名います。よりたくさんの方を巻き込みながら、これからも活動を続けていきます。

7. 達成度 100%

各種学習会などを通じて、政治家を含めた政策策定者に、小型武器、子ども兵などの課題解決に向けた政策形成を働きかけます

ATT(武器貿易条約)制定に向けて、外務省が行う意見交換会に出席し、政策形成を働きかけました。

8. 達成度 100%

ひとや地球に優しい企業の在り方を提示し、特に中小企業のCSR推進を応援します

団体賛助会員を通しての支援だけでなく、寄付つき商品などの企業との連携を深め、CSR推進を行いました。

9. 達成度 100%

活動地域にて、対話による平和構築を目指し、各種セミナー、ワークショップを実施します

ウガンダにて、不法小型武器問題の啓発セミナーや、地域住民を対象に平和教育のためのワークショップなどを開催しました。

10. 達成度 100%

活動地域事務所にて、スタッフの育成を行い、現地人による主体的な運営を目指します

ウガンダは2011年度に現地スタッフによる運営体制へ移行しました。カンボジアでも個々のスタッフのスキルアップのための指導を行いました。また、2012年11月にはウガンダ、コンゴ、カンボジアからスタッフを集め、合同研修を行いました。

1. 達成度 32%

各種教育機関よりインターンを200名受け入れ、平和の担い手を育成します

各種教育機関より、63名のインターンを受け入れました。たくさんの方のインターンがそれぞれの得意分野を活かして活動に取り組み、事業の継続、発展につながりました。

2. 達成度 100%

スタディツアーを通じて、100名の平和の担い手を育成します

カンボジアのスタディツアーには延べ18名に参加いただき、その他、希望者への現地視察の案内を含め、計190名の方をカンボジア、ウガンダ、ラオスにて案内しました。

3. 達成度 50%

子ども兵、地雷などをテーマにした平和教育プログラムを開発し、各種教育機関に提供します

地雷をテーマにしたバーチャルスタディツアーを実施したり、子ども兵の課題を伝えるための映像を作成し、教育機関に提供しました。

4. 達成度 100%

平和教育プログラムを担える教職員を育成するためのセミナーを実施いたします

教職員の集まりでの講演会を3回実施しました。その後、各教育機関での講演にもつながっています。また、行政での講演会も増え、一般向けの講演、職員研修としての講演合わせて36回実施しました。

5. 達成度 100%

NPO/NGOに関心を持つ学生・若者に対して実践型セミナーを実施します

子ども兵や地雷の課題に特化するだけでなく、NPOの運営の仕方、プロジェクトの立案や評価、ファシリテーションなどの講座を、定期報告会の中で設けたり、他団体主催のイベントで登壇しました。





**栗田 佳典** (くりた よしのり)

静岡県出身。1年半のインターンシップを経て、大学卒業と同時に職員として、テラ・ルネッサンスに勤務。日本国内での業務を担当し、広報、経理の仕事を兼ねながら、年に約20回、主に教育機関にて講演を実施。アフリカで出逢った元子ども兵や自身の心臓病の体験を通し、「いのち」の大切さを子どもたちに伝えている。



**渡邊 恭晃** (わたなべ ゆきあ)

小学校の卒業文集に書いた夢は「世界で苦しんでいる人の支えになること」。ラオスの小学校建設やウガンダでの孤児院での活動に携わりながら、絵を通して子どもたちの見ている「せかい」に出会う。彼らの可能性を未来へとつなぐ人になることを目指し、大学では平和学を学んでいる。2013年6月からテラ・ルネッサンスのインターンを開始。

(右上)イベントで活動紹介を行うインターンシップ生  
(右下)イベントでの物品販売の様子  
(中)2010年に開催した10周年記念イベントの様子



きっかけをつくる「啓発」、縁をつなげる「育成」その両輪の中で

**渡邊** マニフェストの中で、栗田さんは主にどの分野に関わってききましたか？

**栗田** マニフェストは3つのカテゴリーがあるので、その中の特に「育成」「啓発」の部分に大きく関わっていました。

「育成」と「啓発」は共通する部分もあるのですが、まず「啓発」の部分では、「100万人の平和に関心を持つ人を増やす」ということで、きっかけづくりとその整備に専念しました。私たちが取り組んでいる地雷や子ども兵、小型武器の課題の解決に向けて取り組んでいくために必要なものは関心です。その関心を集めるためのきっかけを作るために、イベントへの出展や講演、ウェブサイトやSNSを活用し、広報を行いました。そして、活動への参加の入り口をたくさんつくるために、使用済みインクカートリッジ、携帯電話、書き損じハガキ、古本等を集める活動

例えば、さらに関心を持つ人が増えるタイミングだったとも言えます。

**渡邊** マニフェストを始めた時、例えば「啓発」の100万人つてすごい数だと思のですが、マニフェストが実現すると思いませんか？

**栗田** 正直なところ、最初は、「育成」の10万人、「啓発」の100万人という数字はあまりにも大きすぎて想像がつきませんでした。しかし、この目標をもつて、実現したいという思いはこの時から強くありました。こういった具体的な数値目標を立てることで、私自身何のために動いているのか、日々の活動がどのようにつながっているのかを理解(把握)し、活動に集中できるようになりました。

たっくさんの「人材」に支えられて、どんな課題も乗り越えることができた

**渡邊** このマニフェストを実現していく上で苦労した点はありましたか？

の企画や整備にも取り組みました。次に「育成」の部分では、「10万人の平和の担い手を育成する」ということで、「啓発」を通して関心を持つていただいた方などを対象に、インターン・ボランティアの受け入れや支援者サービスを通じて、本会を周りに紹介いただくための仕掛けづくり、教職員への講演、カンボジアへのスタディツアー、NPO・NGOに関心を持つ方々へのセミナーの開催などを行いました。

**渡邊** マニフェストを始めた2010年のテラ・ルネッサンスの状況はどのようなものでしたか？

**栗田** ちょうどテラ・ルネッサンスの転換期とも言えるようなタイミングだったと思います。2005年以降活動国が増えるとともに、メディアへの露出も増え、書籍の出版や企業との協働などを通して、関心が集まっていた頃です。そして、活動への参加のための入り口も書き損じハガキの回収などの選別ができた。だからこそ、明確な目標を持ち、仕組みを工夫し、それに対する仕掛けを積極的に

**栗田** はい。このマニフェストを実現するために欠かせられないもの、それは「人材」だと思います。その「人材」で様々な学びの機会をいただきました。

イベントのブース出展やウェブサイトの更新、DVDなどの広報物を作成するのも、どの作業においても決して一人では出来ません。そのため、職員だけでなく、インターン生、ボランティアと「広報」チームを組んで、それぞれ役割分担をしながら、活動を行いました。特に苦労したのは、この体制を作り上げていくための過程です。それぞれのいいところを活かし、この目標の達成に向けて、いつまでに誰が行うのか、指示を出しながら、チームで取り組むということ、それをマネジメントすることが、難しかったです。ですが、やりがいもあり、楽しみながら、チームみんなで乗り越えてきた3年間とも言えます。結果として、27本もの動画をウェブサイトに掲載ができ、ウェブサイトの改善を行うことができました。また、京都や東京でのイベントもインター



はどのようなものでしょうか。

**栗田** どんな社会においても課題というものがあると思います。私は、その課題に対して無視するのではなく、関心を持つ、関心を持ち続ける人がいる社会を目指したいと思っています。海外だけでなく、日本国内、地域、学校や会社、団体もしくは家庭内など、それぞれで起こっている問題に対して、目を背けずにその問題に向き合うを増やすことができれば、社会は必ず良い方向へ変わっていくと私は考えています。

**渡邊** 最後に、支援者（パートナー）の皆さまへのメッセージをお願いします。

**栗田** 機関誌の「結晶母」とは、結晶ができるとき、最初にうまれる結晶のことです。結晶母の周りに同じ形をした元素が集まって、ひとつの大きな結晶が作られます。気づけば、この3年で、私の周りにたくさん「結晶母」が誕生していました。そこにたくさん元素が集まり、またひとつ、さらにもうひとつと結晶が生まれていき、たくさん結晶がテラ・ルネッサン



(上)2010年に開催した10周年記念イベントの様子



スの周りに増え、そしてそれがつながりあっています。

テラ・ルネッサンスをきっかけに平和に向けて行動する人が増え、そこにまたたくさん関心(人)が集まり、活動の輪が広がり、新しい可能性が広がっていく。そんな社会をこれからも目指していきたいらと思っています。思いをともにする、よりたくさんパートナーを増やしていくために、これからもあきらめずに活動が続けていきます。

やし、柔軟に対応することをこれまで心がけてきました。

**渡邊** そんな入り口を支える京都事務所の役割とはどのようなものですか。

**栗田** 京都の事務所は日本と現地を繋ぐ架け橋の役割があります。日本で関心を持つ人を増やし、この問題を解決したい、地雷をなくしたい、元子ども兵の社会復帰を応援したい、そんな方々の入り口となり、寄付や活動費に代わる物(書損じハガキなど)を集めて、それを活動費として現地に届ける。つまり、日本から支援者の人たちの思いとお金を現地に届けるのが、まず一つ目の役割です。

二つ目の役割は現地から、私たちの活動現場でどのような変化が起こっているかということ、日本の支援者に伝えるということです。

日本から現地、現地から日本、それをやり取りして、架け橋となるのが京都事務局で働く私たちの役割だと思っています。

重要なのは、現地のスタッフや受益者に私たちがどのような思いでこの活動に取り組んでいるのか、

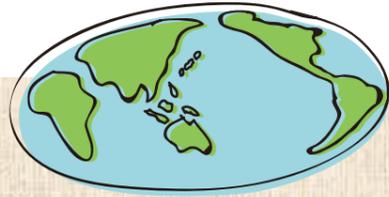


(左)事務所に届いたたくさんのインクカートリッジ (右)イベントで活動紹介を行うインターンシップ生

そして、支援者がどのような思いで応援してくださっているのか、この活動の資金はどこから来ているのかをちゃんと伝えることだと思っています。ただお金を使っている現場を運営するだけではなく、それがどういった想いで繋がっているのかこれを忘れてはいけません。実際にウガンダでも、「日本の皆さんがこうして私たちの取り組みや私たちのことを考えて支援してくれていることがとても嬉しい」という声もよく聞きます。日本からお金だけではなく、想いも、そして現地からもいろんな情報を届けていきたい。その架け橋である役割はこれからも続きます。その役割を果たすために、日本国内で具体的に行うことこそが、マニフェストに掲げる「啓発」と「育成」だと捉えています。

これからも、  
テラ・ルネッサンス  
という輪(和)を  
広げていくために

**渡邊** 栗田さんが目指す社会と



パナソニック株式会社 ブランドコミュニケーション本部  
コーポレート統括室 CSR・社会文化グループ  
主事 田中 典子さん

パナソニックは、2011年よりアフリカ諸国の課題解決に取り組むNPO/NGOの広報基盤を強化支援するプログラム「Panasonic NPO サポートファンド for アフリカ」を開始しました。テラ・ルネッサンス様とは、その第一回ご応募がご縁で今日に至っています。第一回でご応募いただきました内容は、財源確保の偏りを改善する取り組みとして、WEBサイト整備を通じ運営の組織基盤を構築するものでした。3年間の助成を経て、その体制づくりや、英語、中国語といった日本語以外のサイト制作にも意欲的に取り組んでいこうとする真摯な姿勢は、他団体様をはじめ個人的にも学ぶところが多くあります。

これから益々、「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」に向けた支援が重要になってくると思います。情報の伝達は、伝えたから終りではなく、伝えてからが本番であり、日本発信でグローバルに活動する団体として、今後も期待しています。

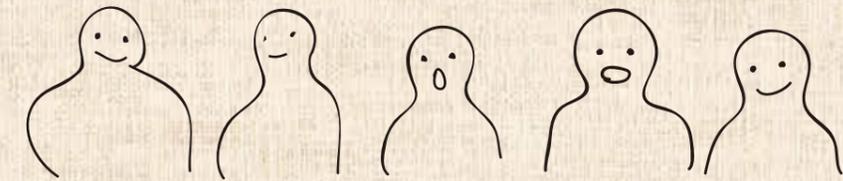
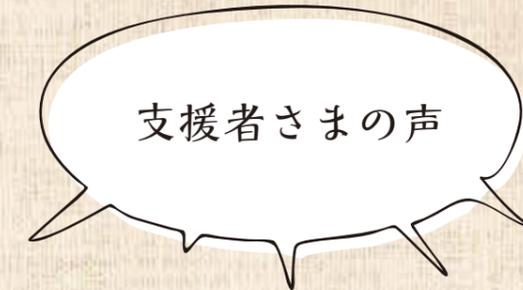


大阪暁光高等学校 2年 中西 匠貴さん

僕は中学生の時にケニアに行った経験がある。スラム街で小さな子どもが、ゴミ山から食べ物を探して生きている姿に衝撃を受けた。

今年、文化祭で「アフリカの問題」をテーマにすることを提案した。鬼丸さんの「ぼくは13歳職業、兵士。」を読み、直接子どもたちの状況を聞きたいと思い、栗田さんに講演をお願いした。僕は子ども兵は殺されるから苦しんでいると思っていた。でも実際は、逃げ出しても帰る場所がなく、薬物依存から抜け出すために苦しんでいることを知った。スタッフは、そっと手を差し伸べて温かい家族のように接している。「一人一人の力は微力だが、決して無力ではない」という栗田さんの言葉が、僕の胸に深く浸み込んだ。幼い時に誘拐され、殺人の道具として働かされ、愛情に飢えた子どもたちには、衣食住や学校などの物質面だけでなく、人間らしく生きることができる大きな家族の一員になるチャンスを貰えたのだ。

子どもたちが、決して絶望せず未来の自分に希望を持って頑張る姿を知り、僕も希望を持ち未来に向かって進まなければいけないと思った。僕たちには、次世代を変えていける大きな力があるのだから。テラ・ルネッサンスの人たちの支援をしている姿は本当に格好いいと思う。僕も将来は、誰かを助けたい。誰かのために必死に支えられる人になりたいと強く思うようになった。



熊本県庁 H22-H24 人事課人材研修室  
和田 大志 さん



## 『微力への信頼』

### ～鬼丸さんとの出会いから学んだこと

鬼丸さんとの出会いは派遣研修先の早稲田大学マニフェスト研究所人材マネジメント部会での講演。初めての衝撃で「この思いに何とか応えたい。今の自分に何が出来る? “思いをつなぐ”ことなら出来る!」と上司に直談判。結果、新採職員研修や特別セミナーにお越しいただくようになり4年目を迎えました。特別セミナーでは年度末の繁忙期にも関わらず、全職員の10%にあたる450人から申し込みがありましたが、これだけの反響は後にも先にも鬼丸さんだけです。また、それを機に九州・沖縄の8自治体(団体)が鬼丸さんの講演を企画。決裁権限もない一職員に“思いをつなぐ”役割ができた経験でした。

我々は『微力』だと感じると、逆に自分たちの取り組みに否定的な感情さえ持ってしまうが、鬼丸さんは「微力ではあっても無力ではない。」と語りかけられます。振り返るに『一歩踏み出す』とは、微力を微力だと認識したうえで、信じ続け、歩みを継続できるかどうか、だということ学びました。

熊本県庁では、講演を聴いた職員による自発的な変革へのチャレンジが始まりました。仲間と輪(和)を成して熊本県を笑顔と感謝で溢れる地域にしていこうと思っています。



## 大槌復興刺し子プロジェクトのめざすもの

大槌復興刺し子プロジェクト(※以下、大槌刺し子)は、東北地方に根ざした伝統技術「刺し子」を活用した事業を展開しています。

刺し子により、大槌町を含めた岩手・三陸地方での雇用機会の創出、そして、地域社会の復興、伝統技術の継承や振興に貢献することを目指しています。

## 大槌復興刺し子プロジェクト 事業方針

東日本大震災から10年後の2021年までに、同プロジェクトを現地法人化します。  
そして、現地職員と地元住民の皆さんによる運営を実施いたします。  
上記により、地域住民がオーナーシップを持った「復興」を実現できると、私たちは信じています。

そのために、以下の事業を実施いたします。

1. 刺し子製品の企画・販売を実施する。  
被災された方々への商品制作代金の支払を通じ、生活再建を促進する。
2. 商品制作の技術指導講習会などを開催する。  
被災された方々の相互交流を活性化させ、心理社会的な負担の軽減を図る。
3. 同プロジェクトをコミュニティビジネス(※)として事業化する。  
継続的な事業展開を通じ、岩手・三陸地方における雇用を促進する。
4. 刺し子を中心とした、伝統技術を活かしたビジネスモデルを構築する。  
伝統技術の継承・振興に寄与する。

※ コミュニティビジネス  
地域の課題を地域住民が主体的に、ビジネスの手法を用いて解決する取り組み (経済産業省 関東経済産業局より)



# 東日本大震災復興支援

## 3年目のチャレンジ

大槌復興刺し子プロジェクト

<http://tomotsuna.jp>

岩手県上閉伊郡大槌町において、日本に昔から伝わる手仕事の一つである「刺し子」を活用した商品の企画・制作・販売を行う、大槌復興刺し子プロジェクトを運営しています。  
商品の制作にかかわる刺し子さんは、20代から80代までの幅広い年齢層に及び、その中心となっているのは、中高年の女性の方々です。  
商品の買取、材料の配布、商品化作業を行う「刺し子会」を毎週開催し、商品制作に必要な技術を学ぶ「技術講習会」、刺し子さん同士や、刺し子さんと現地を訪問された方々の交流の場としての「お茶っこの会」を随時開催しています。また商品は、インターネットや各地のイベント、店舗で販売しています。



後藤 富子 さん  
(刺し子さん)



佐々木 静江 さん  
(岩手事務所スタッフ)



富子 津波や震災はみんなに起こったことだから今でも喋っているけど、環境の変化というのは、家があるなだけで、あまりないんです。仕事も相変わらずやっているし、運動も旅行も相変わらずやっているの

静江 震災後の環境や心境の変化は？

富子 津波や震災はみんなに起こったことだから今でも喋っているけど、環境の変化というのは、家があるなだけで、あまりないんです。仕事も相変わらずやっているし、運動も旅行も相変わらずやっているの

静江 刺し子をする時間帯は？

富子 大体夜です。みんなは夜はできないって言うけど、私は昼間は仕事をしているから。仕事から帰ってきて、ご飯を食べて、お風呂に入って、寝るまでの1〜2時間。そうして刺し子をしているときに憩いのひととき。テレビを見ながら、二針縫って、これはだめだなと、ほめてまたやり直したり。刺し子を始めから、楽しみがふえました。

静江 刺し子をする時間帯は？

富子 大体夜です。みんなは夜はできないって言うけど、私は昼間は仕事をしているから。仕事から帰ってきて、ご飯を食べて、お風呂に入って、寝るまでの1〜2時間。そうして刺し子をしているときに憩いのひととき。テレビを見ながら、二針縫って、これはだめだなと、ほめてまたやり直したり。刺し子を始めから、楽しみがふえました。

静江 刺し子をする時間帯は？

富子 パーカーとかマルチクロスですね。これまで、ふぎん以外は大体一通りつくってきたかな。

静江 刺し子をする時間帯は？

富子 刺し子をする時間帯は？



内野 恵美

上智大学比較文化学部社会学科卒。自動車メーカーにて海外販売会社のマネジメントに従事した後、国連人口基金東京事務所にて広報アシスタントの仕事をする。2013年3月より大槌復興刺し子プロジェクトにて、生産・販売管理の仕組み化と業務改善、及び成長戦略の立案・実行に携わっている。



内野 佐々木静江（以下、静江）さんが刺し子プロジェクトを知って始めたのはいつごろですか？

静江 2011年の8月の終わりごろです。姉と妹がやっていたので、誘われて、大ケ口の集会所に行きました。最初の印象としては、私は裁縫が苦手なので、来たのはいいけど、私のつくったものが商品になることは絶対ないだろうと思っていました。ただ、暇だし、少しお金ももらえると聞いたので、軽い気持ちで始めたんです。そのときは、どこからボランティアの人たちが来て、お茶っこみたいな時間つぶしみたいな感じでやっているんだらうなと思っていて、今まで続くような団体の人たちがやってくれているとは思わなかったんです。

内野 刺し子をしはらくお休みされて、今年の4月からパートでどうですかという声かけがあつて、どう思われましたか？

静江 何かの間違いじゃないの、抽選で当たったのかなと思いました。鈴鹿さん（岩手事務所所長）に「何で私に声をかけたんですか」と聞いたら、「静江さんの刺し子に対する思いをくんだ」と言ってくれて。前から刺し子のブログにコメントを書いたりしていたから、鈴鹿さんの頭にあつたんだらうなと思います。

内野 刺し子をしていいたときと、スタッフになつたときの違いはありますか？

静江 責任感が出てきたと思います。

内野 今担当している仕事は？

静江 コロナ商品の商品化と管理です。

ふだんは検品と商品の発送を行っています。内野 仕事内容で大変なことは？

静江 パソコンと電話ですかね。克服していかないといけない。

パソコンは家にあつたんですが、CDを聞いたりする程度で、今まではずっと面倒くさいなと思って遠ざけていたんです。でも今は、事務所の皆さんがパソコンがわかる人たちなので、いろいろ教えてもらって、ゼロから20くらいのリベルにはなつたかなと思います。

電話ということでは、電話以外でも丁寧な言葉で人と話すのが余り得意ではなくて、電話でモジモジという感じだったんですが、これも事務所で電話の受け方の講習を受けたことよつて、今では電話が鳴つたら、出てみようかなと思えるくらいになりました。

失敗も多いけど、ちよつとできるよつになつたかなと思う日もあつたり、今までは経験がないことでも、少しずつ覚えていくという確信がありますね。

内野 前のお仕事と比べて、お渡しできているお金も減っているんじゃないかと心配になるんですが。

静江 前は、工場とか居酒屋で稼いでいたので、10分、20分と同じところにいることがない状況のところでも働いていました。ここは、ゆつたりした空気、ゆつたりしたスタッフのお話で、今までのことがない環境だったので、最初は、ちよつと物足りないなという感じで、私、こつこつと

で。ただ、私はヘルパーの仕事をしているから、いろいろなところに行つて話を聞くんですね。受け入れずにさらつと流せばいいんだけど、全部受け入れてしまつて、一緒に泣いてしまつて。泣き虫になつたというのが一番の変化かな。生活そのものの変化はないです。精神的な変化が多いですね。

あと、震災前は、眠剤なんて飲んでたことがなかつたんですが、震災後は飲むようになりましつた。それでも、眠気がこないから、本を読んだりして眠気を誘つていたんですが、眠れなかつた。ところが、刺し子をするよつになつて、眠れるよつになりました。刺し子のおかげで助かっています。

静江 そついえば、最近、復興住宅に引越されたんですよ。

富子 震災前は、二階建ての二戸建ての家に一人で住んでいました。一人だけだ、仏さんをみないといけないから。廊下があるのが普通で、何とも感じないんですよ。それが仮設に入ると、玄関というより、部屋でしょう。私がいた仮設は四畳半だったから、四畳半にベッドがあつて、仏さんがあつて、テレビがあつて、タンスがある。引越したら、廊下があつて、歩いてトイレに行ける、歩いてお風呂に行ける、歩くんだよなと思つて。今までは、振り向いて四歩歩けばトイレ、四歩歩けばお風呂だったでしょう。仮設の人は運動不足だつとよく言いますよ。そのことが、復興住

で働けないんじゃないか、続かないんじゃないかと思つていました。お金もそんなにいっぱいもらえないし。だけど、私なりのやりがいを見つけたよつな気がしました。

内野 やりがいとほつとよつなつてますか？

静江 今までは、決められたことを毎日やつているよつな状態だった。マニュアルがあつて、そのとおりに話さないといけないとか。それが、刺し子で働くよつになつたら、あなたはこれをやつてくださつと、仕事が任される。スタッフそれぞれに持ち場が任されているので、それがうれしいです。私がやらなければ誰もできないよつな状況があるよつで、やるべき仕事を頭に入れながら、毎日しつかりやる。まだ完璧にはこなせていないけれど、頑張らなきゃという気持ちがあります。

内野 今後こつなつたらいいなと思つことはありますか？

静江 大槌の人に刺し子プロジェクトを知つてもらつと、刺し子がどういふものか知つてほしいよつなつと、どういふ団体が支えてくれるのかというのを、みんなにわかつてもらいたいと思つています。そついう意味では、事務所にて商品化をしてるんじゃないかと、営業というか、自分から外に出て、こついうものもありまよつとアプローチしていかないとけないなと思つています。

宅に来て初めてわかつたんです。

私は、仮設にいるときは、わざと用事をつくつていたんですよ。旅行の用事とか、友達と食事会の用事とか。住宅に来てからは、早く住宅に帰りたいよつな気持ちがあるから、用事はなるべく減らしています。

静江 刺し子プロジェクトには、支援してくださつている方がたくさんいます。後藤さんは、安田未知子先生や西水美恵子さんにはお会いしたことがありますか？

富子 あります。

静江 お会いしたときどうでしたか。

富子 沖縄の安田先生は、ひめゆり部隊で従軍されたよつなつと、私たちが想像できないよつな体験しているよつな。先生は、私たちは津波を経験しているからと言つたけど、それとはまた違つた体験ですよ。それを内に秘めて、笑顔で一言で言つと素敵な方。目標というおこがましいけれど、何か信念があるから、あんなに素敵でいられるんだなと思つています。

西水さんは、最初に会つたとき、新しい刺し子さんだと思つたんですよ。後から世界銀行の副総裁をされていた方だよと聞いて、びっくりしました。それくらい、偉ぶらないよつなつと、飾らない人柄の方ですね。

静江 支援者の方々へのメッセージを一言お願いします。

富子 ありがたいよつな言葉しかない。いつとも本当に感謝しています。感謝の言葉です。



## テラ・ルネッサンスらしさ

～ひとり一人に寄り添う支援～ 文 牧野 由起子

震災によって、現地の人は、多くのものをなくしたとされています。大切な家族や友人、家、仕事などです。でも、何もかもなくしたわけではありません。悲しい出来事を乗り越えていく力や、新しいことに挑戦する力を持っています。

刺し子プロジェクトを通して、そんな人々に私は多く出会いました。

支援することは、自分の考えや、自分が属している社会のルールを押し付けることではないでしょう。支援する側、される側、互いは対等な関係です。どちらか一方だけが正しいわけではありません。その土地の歴史、文化、環境、習慣、暮らす人々。それぞれ異なっているわけですから、価値観に違いがあって当然です。ある意味、どちらも正しいと言えるかもしれません。支援に携わるとき、相手に自分の価値観を押し付けていないか、問い続けなければならないと考えています。

ウガンダでも、カンボジアでも、日本でも、支援の姿勢は何ら変わりません。

結局のところ、支援というのは、人が持っている力を信じることではないでしょうか。支援の主人公はあくまでもその人自身。支援する側はその手助けをしているに過ぎない。地域のことであれば、地域の人が考え、決定していく。どのようなことが望ましいか、それを決めるのは地域の人自身。支援する側の人間は、地域の力が最大限に発揮できるよう環境を整えていく。自分の力で道を切り開いていこうとする人に、寄り添い続けていく。そうした支援をこれからも行っていきたいと考えています。



中村 明美 さん  
(刺し子さん)



**静江** 明美さんが刺し子を始めたいきっかけは？  
**明美** 2011年の7月の頭、お友達に城山で刺し子をやっているよと言われて。そのときは城山にいて、ダンボールハウスでした。みんなダンボールに住んでいたんです。まだそのときは私も知らなかった。刺し子と言われてもできないと思っ

ていたんです。ただ、家はなくなっただけ、仕事場が残って、ミシンが生きているのも何かの役に立つと思って、何となく携わりたい気持ちがありました。

**静江** 刺し子では主に何をしていますか？  
**明美** タグ付けが主ですね。

**静江** 刺し子以外でふだんやっていることは？  
**明美** 洋服の一点物とか、お直しとか、お祭り系の衣装づくりをしています。

**静江** 明美さんにはよく特注品を手がけたことや楽しかったことはありますか？  
**明美** 特注品は大好き。ウエディングボードとか、三点セットのテーブルクロスもあつたでしょう。特注品はでき上がるまでが大変だけど、でき上がるとうれしいですね。

**静江** テラ・ルネッサンスの取り組みについて一番衝撃的だったことは？  
**明美** 刺し子が今まで支援していることではなかったということですね。もともとやっていたのは、地雷や子ども兵がどうこうということでしょう。そういう人たちが大槌では刺し子だったから。

そうそう、私、去年の結晶母の表紙の裏に書いてある、この言葉が好きなんです。

私が太陽を遮っていないか、私が雨水をせき止めていないか、私が土の上に煉瓦を積み上げていないか、私が成長の芽を摘み取っていないか、私たちの「寄り添う援助」とは、「種」を改良することでもなければ、種が発芽することを教えることでもない。ただ、種が発芽できるように、寄り添い、その環境を整えていくこと。それが、自治と自立を育むという、テラ・ルネッサンスの国際協力のあり方です。

初めて読んだとき、誰が書いたのよっていうくらい感動的だった。いやらしく与えるわけでもなく、無理やり強制するわけでもなく、その人その人の持っているものを引き出すという感じでしょう。

あれを思い出して、言いたいことがあってもあえてしゃべらないとか、見て見ぬふりをするとか、子どもたちにもそう接するようになった。結局、自分でやってみないとわからないから。

**静江** あの言葉は、子育てにも通じるころがありますよね。

ところで、明美さんのご家族で、特に娘さんがテラ・ルネッサンスに興味があると聞いていますか？

**明美** 中学三年生のときに、社会の授業で、自分の知っているNPO・NGOについて調べなさいという自由研究が出たんです。

そのとき、テラ・ルネッサンスのことを発表したんです。

お姉ちゃん、鬼丸さんにも会ったことあって、刺し子のスタッフにも会って話をしたい中で、NPOに興味が出てきたみたいで、それに対して今自分で考えているところだと思えます。もししたら、そういう方向に進もうとしているのかもしれない。

私としては、私が携わっていること、刺し子プロジェクトやテラ・ルネッサンスに対して、否定せずに、いいことだと思ってくれたことがありがたかったですね。

**静江** 刺し子始める前と後で、何か変わったことがありますか？

**明美** 単純なことだけど、楽しみ、やりたいことがつふえた。刺し子は、うまく刺せるようになるには、10年、20年とかかるものだから、年をとったときにやっていたように、ラッキー、見つけたという感じでした。でも、震災がなければ、刺し子にも、テラ・ルネッサンスにも会わなかったから、そこが複雑なんです。たくさんの方が亡くなって、これを自分なりにどう納得させていくか。まだ先は長いですね。

**静江** 最後に、支援者様のメッセージを言いますか？  
**明美** 幾らお礼を言っても言い足りないくらいです。一人ずつにお礼を言うことはできないので、今は、日々努力して刺し子をつくる、きちんとしたものをつくっていくというのが、恩返しかなと思っています。



**岡村 充泰**（おかむら みつやす）

1963年8月30日京都市生まれ。1986年 繊維専門商社である瀧定株式会社入社、企画販売を担当。1994年 独立し有限会社エムズカンパニー設立。営業代行、事業開発、貿易業務等を担う。1999年 長年赤字の本業建て直し役として株式会社ウエダ本社非常勤取締役就任。2002年 ウエダ本社代表取締役社長就任。2003年 子会社を統合し、新ウエダ本社として第二の創業を図る。2008年 創業70周年を記念に、京都流議定書イベントを企画。価値観の变革を訴えて今年で6回を数える。



**小川 真吾**（おがわ しんご）

大学卒業後、青年海外協力隊員としてハンガリーに派遣、旧ユーゴ諸国とのスポーツを通じた平和親善活動などに取り組む。帰国後、カナダ留学などを経て2005年より、テラ・ルネッサンス、ウガンダ駐在代表。ウガンダ及びコンゴ民主共和国における元子ども兵の社会復帰支援事業などに従事し、2011年テラ・ルネッサンス理事長に就任。



# テラ・ルネッサンスを支える人々

## 株式会社 ウエダ本社

テラ・ルネッサンスでは、誰でも参加できる身近な国際協力として、使用済みインクカートリッジやパソコンなどの回収を呼びかけています。回収したモノを再利用・リサイクルし、それによる収益を海外での支援事業に活用するという取り組みです。それにより、これまで400万円以上の活動資金が確保できていますが、今回、この回収事業に2009年からご協力いただいているウエダ本社（京都市下京区）の岡村充泰社長と、社員の市村友行さん、王智英さんにお話をお伺いしました。

**小川** 本日はお忙しいところお時間をとっていただきありがとうございます。まず、最初に「ウエダ本社」と岡村さんご自身の自己紹介を簡単にお願います。

**岡村** 「ウエダ本社」は、私の母方の祖父（ウエダ）が創業者で、昭和13年（1938年）に創業して、ちょうど75周年を迎えている会社です。私自身は会社に入るつもりはなかったのですが、サラリーマンとして繊維商社に勤めて、30歳で独立して別会社を創業してしまいました。ところが、この会社（ウエダ）が倒産するかも、という状況にまなつて、関わりざるをえなくなつた。それが14年前（1999年）のことです。

**小川** 会社が倒産寸前の時に戻ってきたということですか？

**岡村** 立て直したというより、まず、規模を6分の1くらいにしました。日本でリストラというクビを切るというイメージがありますが、本来、リストラは「Restructuring」。

つまり再構築という意味です。ですので、首を切らずに、社員には別会社で働くなどの受け皿を用意して、会社をスリムに再構築していったわけです。

**小川** ただ、そんな状況で戻ってきたわけですから、社員を解雇したとしても岡村さん自身が責められることもなかったと思いますし、そもそも会社に戻らないという選択肢もあつたのではないですか？

**岡村** その時は、私が会社に戻らなければ確実に倒産するという状況でした。口幅つたいですが、倒産すると社員やその家族だけでなく、仕入先も皆、路頭に迷わせてしまうことになる。そんな状況でしたから、私は「後には引けない、腹をくくることができない」という思いでした。

**小川** なるほど。その時の経験は、今の仕事や様々な活動にもつながっているのですか？

社員が誇りに思う「会社の存在価値」を作りたかった



**王 智英**（おうともひで）

1988年4月25日京都市生まれ  
京都文教大学に入学し、文化人類学を専攻  
（フィールドワークを通して、異文化や現代社会の諸問題を考察）  
2011年 株式会社ウエダ本社 入社



**市村 友行**（いちむらともゆき）

1971年12月18日 京都生まれ  
2002年 ウエダ本社入社 コピー機販売に従事  
2008年 コピー責任者として富士ゼロックス全国キャンペーン3年連続第1位達成  
2013年 「つなげるチーム」チームリーダー就任



**岡村** そうですね。この経験は、私の人生にとって大きな転換点でした。今、テラ・ルネッサンスに関わっているのも、この時があったからだと思います。以前の自分は、年に3分の1くらいは海外に滞在しながら仕事をして、「仕事もプライベートも敷居なく、楽しい時間を過ごす」という理想のライフスタイルがありました。

しかし、倒産寸前の会社に入っ  
て、当時は「やる気ないムード」  
が蔓延しており、沈滞ムードが漂っ  
ているわけです。で、それを何と  
か良い会社にしたという思いが  
一番であって、「では、良い会社と  
は何か？」と考えたとき、社員に  
誇りを持つてもらえる会社ではな  
いかと思っただけですね。では、そ  
のためにどうしたらいいかと考え  
て、出た結論は「会社の存在価値  
を創る」ということでした。

**小川** 社会にとって必要とされ  
る価値のある会社であれば、そこで  
働く人たちが誇りを感じてくれる  
のではないかといいことですか？

**岡村** そうです。会社に存在価  
値がなければ、社員は何のために

働いているかよくわからなくなっ  
てしまいますからね。いくら表向  
きよく働いてくれても、本心から  
やりがいや誇りを感じてはくれま  
せんよね。

そして、結局、なぜ会社が倒産  
するかというと相手に求められて  
いないからです。そして、求めら  
れるような価値を創ろうと思っ  
と、そのためには存在する意義が  
ないといけないわけです。そこで、  
モノ作りをしていないディーラー  
としてどうやったら存在意義・価  
値が創れるかと考えたときに、世  
のなかの社会の課題に向き合おう  
と思っただけです。自分たちが求  
められる存在になるためには、困っ  
ていることに向き合って、そして  
役に立つようにする。それがすべ  
ての基本なんです。自分達の事  
業を通して世の中の役に立つ、困っ  
ていることに向き合うようになれ  
ば、「あの会社のおかげで」「あの  
会社があったから助かった」とい  
うことになり、それが存在意義・価  
値になる。そのことに気づいてか  
ら、私自身の人生も大きく変わっ  
ていきました。

カートリッジの回収)なら、「会社  
としてできる！他の社員も巻き込  
める！」と思いました。実際にイ  
ンクカートリッジの回収を呼びか  
けることが仕事にとってプラスに  
なっていることもありますね。

**小川** 王さんは入社3年目と聞  
いていますが、そもそもウエダ本  
社を選んだのは、会社が社会貢献  
(CSR)に熱心だったことに惹か  
れたからなのですか？

**自分自身が  
「どんな価値を創れるのか」  
を考えている**

**王** というよりは、社長面接の  
時に、社長自身の生き方を聞いて、  
それに魅力を感じたからです。実  
は、大手の企業も含めて内定はた  
くさん頂いていたのですが、一生、  
自分が働いていく会社としての決  
め手に欠けていました。人生のほ  
とんどは職場で過ごすわけですか  
ら、「何のために生きていくのか？」  
と問われた時に、私はこんな価値  
ある生き方をしていると誇れるよ  
うな会社で働きたかったのです。そ

**小川** なるほど。では、テラ・  
ルネッサンスの回収事業に協力しよ  
うと思った直接的なきっかけは何  
だったのですか？

**岡村** (テラ・ルネッサンス創設者  
の) 鬼丸さんの話を聞いたこと  
です。ただ、すぐに何か行動を起  
したわけではありませんでした。  
実際にそれから一年くらいは会社  
としては何もしていませんでした。

**小川** 私の知っている行動力にあ  
る岡村さんにしては少し意外な感  
じもしますが、それはなぜですか？

**まずは自社の  
社員のことを考える**

**岡村** 経営者にとって一番大切  
なのは社員のことをまず考えるこ  
とだと思っています。ですから、  
京都を拠点にして仕事をしている  
私たちにとって、アフリカの問題は  
あまりにも遠すぎて、さすがに会  
社では取り組めないと考えていた  
んです。会社として整合性の取れ  
ること以外は、個人で支援しよう  
と決めていました。私の独りよが  
りで会社の存在価値につながる

れがウエダを選んだ理由です。

**小川** なるほど。実際に入社し  
てから、そんな価値ある仕事はで  
きていると思いますか？

**王** そうですね。まずは自分が  
「どんな価値を作れるのか」とい  
うことを、仕事(営業活動)をする時  
は、いつも心に留めています。取  
引先(お客様)には、「何のために  
オフィス家具を揃えるのか、そし  
て、それがどんな価値につながる  
のか」ということを相手の立場に  
立って説明しています。そうする  
と、熱心に話も聞いてくれますし、  
価値ある仕事につながっているの  
ではないかと思っています。インク  
カートリッジの回収も海外での支  
援活動に役立つ価値のある取り組  
みだと説明すると、多くの方々が  
喜んで協力してくれます。また、  
ある取引先の方は、わざわざ休日  
を利用してインクカートリッジを  
家電量販店に運んでいました。で  
すので、ウエダが回収している意  
味をお伝えすると、とても喜んで  
くださりました。この回収事業は、  
紛争被害を受けた人たちの支援  
など何か社会の役に立つという意



(\*注)京都流議定書

京都は伝統文化の街であるとともに学生の街、古い歴史と新しい創造が同時に存在しています。「京都流議定書」は、それらの動きの間に出会いを作ることで新しい価値を生み出し、京都から世界へと日本独自の価値観を発信することを目的に行われています。(毎年7月にウエダ本社が企画・運営している)

味で、取引先とも目に見える価値を共有することができるとはなにかと思つています。こうした取り組みは、自分にとつても価値ある仕事だと思ひます。

**小川** なるほど。王さんの話を聞いていて、岡村さんがこの14年間、作り上げてきた会社の存在価値というものが、社内にも根付きつつあるように感じました。また、テラ・ルネッサンスでは、支援者の皆様を単なるドナー(資金提供者)ではなく、社会変革のパートナーとして位置づけていますので、回収事業を通して、取引先の方々にも社会問題に対する関心を広げているということはとてもうれしいことです。

**岡村**さんは、これから、どんな価値を社会に発信していくことが大切だと思ひますか？ 毎年開催されている「京都流議定書(\*注)」のことも含めてお話いただければと思ひます。

### 世界へ日本独自の価値観を発信していく

**岡村** もともと、私は京都人でありながら、ここ(ウエダ本社)

を引き継ぐまで京都の事が好きではなかつたんです。「京都人は本音を言わない」とよく言われるじゃないですか。私はどちらかというとオープンな方で、そういうのが嫌いでも、同時に京都には、日本の要素を凝縮した価値がたくさん残っていることにも気がついたので。例えば、京都ではよくある「一見さんお断り」のお店も、京都弁で言う「いけず」の世界で言っているわけではなく、実は、「おもてなしの心」の表れなんです。いきなり、ぼつと入ってきた一見さんには、そのお店の格に合う、その人に合った究極のサービスはできないですから。だから、一見さんはお断りしなければいけないということなのです。そのような日本独自の価値が京都にはたくさん残っています。

ですので、日本のことを考える際に、京都を理解することが重要だと思つたのです。今の日本は、人口が減つていき、GDPも中国に抜かれています。数の論理で考えると日本は落ちて行くしかない。でも、それは目に見える数値での



「成長」で測ればそう見えるだけのことです。日本はそういう面では十分成長したのだから、これから日本がめざすべきは、自身の「成長」ではないかと思ひます。そのために、日本の持つ伝統的価値や、「細やかさ」、「おもてなし」といった価値がとて重要になってくるのではないかと考えています。こうした目に見えない価値こそが、日本の強みであり、それを京都から発信していきたいと思ひています。それが「京都流議定書」を始めた一番の理由でもあります。

**小川** なるほど、日本的な価値を社会に発信していくということですか。

**岡村** そうですね。そんな日本独自の価値を現在の文脈で捉え直すことによつて、新たな価値が生み出されるのではないかと考えています。これからの日本を担う若い世代にはぜひ考えて欲しいことです。

**小川** それは日本だけではなく、混沌とした今の世界にとつても重要な価値だと思ひます。例えば、アフリカへの援助の多くは、欧米的な価値観が押し付けられ、アフリカの人々が本来持っている力や可

能性、文化的価値というものが、ほとんど活かされていません。結果、膨大な援助がなされても、未だ、多くのアフリカ人は欧米諸国に(物理的にも精神的にも)依存しなければ生きていけないような状態に置かれています。相手の立場に立つて物事を考える姿勢や、相手の文化を尊重すること、そして、「和をもつて尊しとなす」といった日本の考え方は、アフリカの人々の自治と自立を支える上でもとても大事な視点だと感じています。日本発祥のNGOとして、私たちが活動理念(すべての人には未来を創る力がある)に基づいて、日本人的な価値を世界に発信していきたいと思ひます。

### 理念に基づいた活動を続けていってほしい

**岡村** テラ・ルネッサンスの素晴らしいところは、そういった組織の理念を共有できているという点ですね。団体を設立した鬼丸さんだけでなく、小川さんにもその理念が浸透している。中小企業と大企業の圧倒的な差はナンバー2の

存在なんです。テラ・ルネッサンスの鬼丸・小川コンビというのは、持ち場が完全に別れた上で理念共有がきちつとできている。お互いの特徴がうまく活かされていることで、組織がうまくまわっているようにも感じます。

私自身、「世のなかの課題は同じです」という鬼丸さんの言葉をずっと心に焼き付けながら、なかなかその意味がよくわかりませんでした。その意味が理解できたのは、小川さんの本(『ぼくらのアフリカに戦争がなくならないのはなぜ? (合同出版)』)を読んでからでした。アフリカのことなんて全く知らなかつたので、目から鱗でした。アフリカで起きていることと、先進国とのつながりがよくわかつたことで、そこから、鬼丸さんの言葉の意味をより深く理解できるようになつたわけです。

**小川** ありがとうございます。これからも、どうぞ、よろしくお願ひいたします。

# テラ・ルネッサンスを支える人々

## 牧野 由起子 (まきの ゆきこ)

大阪府出身。専門学校を卒業後、速記者として働く中で、まちづくりやNPO活動に関心を持つようになる。2002年、仕事を辞めて大学に進学。大学卒業後、海外からの研修生を受け入れているNGOでの住み込みボランティアを経て、2008年よりテラ・ルネッサンスに勤務。2011年10月から2013年1月まで、岩手にて東日本大震災復興支援事業に携わる。現在、京都事務局勤務。



## ファーストステップ・ ジョブグループ

テラ・ルネッサンス事務所に送られてきた使用済みインクカートリッジは、一定期間保管しておいた後、「仕分け作業」というものを行います。「仕分け作業」とは、インクカートリッジをメーカー別、色別に分けて数を数えていくことです。インクを買い取ってもらう際、仕分けたインクのほうが高く買い取ってもらえるため、この作業は欠かせません。テラ・ルネッサンスでは、2009年より、インクの仕分けをファーストステップ・ジョブグループさんをお願いしており、今回は代表の上田さんにお話を伺いました。

### 午後12時からの 作業時間

**牧野** 上田さんと初めてお会いしたのは、2009年でしたね。

**上田** きょうとNPOセンターの野池さんご紹介で。

**牧野** そのころ、テラ・ルネッサンスでは、インクの回収量がふえてきて、スタッフだけでは手が回らなくなってきたので、どこかインクの仕分けを手伝ってくれるところを紹介していただいただけませんか？野池さんにお願ひしたら、ファーストステップ・ジョブグループ（以下、FSJG）さんを紹介していただいたんです。

上田さんのほうには、どのような形でお話があったんですか？

**上田** FSJGでは、「仕事」という行動を通じて社会と関係を持つ、そういう状態をつくることを目的としていることから、グループ内の家事手伝いや内職だけではなく、外部から発注された仕事や外部資源を利用しての仕事など、さまざまな形で当事者本人への仕事の提供を行っています。グループ

外ジョブは、本人たちにとっての選肢の拡大、行動の機会の拡大となることから、そのような仕事を探していたんです。そうしたら、野池さんからはちょうどうってつけの仕事があるよということ、紹介していただきました。

**牧野** そういうことだったんですね。

FSJGさんには、毎月一回、4時間程度、インクの仕分け作業を中心にして、その他にも、発送作業や印刷物の訂正シール貼りなど、その時々に必要な業務をこれまでお願いしてきました。

**上田** 12時から16時という作業時間帯は、事前の打ち合わせのときに、こちらからお願ひしましたよね。電車のラッシュの時間を避けて、本人の行きやすい時間帯に設定してほしいということ。

**牧野** そうでしたね。

**上田** 援助する際、一般的には、個人の側を変えて、現実環境に適應させる訓練がなされます。「ひきこもり」の場合も、現実社会に適應できないと捉え、「できない」ことに注目し、訓練を受けることで

## ファーストステップ・ジョブグループ (FSJG)

当事者本人と親とで構成される脱ひきこもり支援グループ。「今ひきこもりのままでできる仕事(ジョブ)」を創出し、その「仕事をする」行動の成立を援助していくという形での支援活動を行っている。2002年設立。

### 事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1  
立命館大学人間科学研究所 気付

TEL: 090-9253-7052

E-mail: yyn-yoko.kcn.ne.jp

ブログ: <http://blog.canpan.info/fsjg2>

ホームページ:



- 仕事メニュー H22.7.9
- \*\*\*\*\*
- パンフレット修正シール貼り  
(印刷ミスのところにシール貼る。50枚1セット)
  - 新聞切り抜きをスクラップ帳に貼る  
(切り抜き「介護50話」をスクラップ帳に貼る)
  - ギャラリーの番
  - 煙草取り
  - 記念品のアイデア
  - 記念品(クリアファイル)の作製  
(ファイルに貼る絵・写真・イラスト・文字の提案、作製)
  - 看板作り  
(仕事場入口のプレート、横20cm・縦5cmの板に)
  - 古本を売ってほしい  
(ネットでも、近所の古本屋さんでも)
  - 英絵本和訳  
(幼児向けの絵本の和訳です)
  - 門扉ペンキ塗り
  - NPO手伝い  
(インクカートリッジ仕分け作業手伝い)
  - NPOセンタースタッフ手伝い  
(資料の整理など、1~2時間、週1回)



社会性を身につけ、その上で世の中に出ていこう、という方策がとられます。

しかし、FSJGでは、援助の目標である当事者本人のやりたいと思える行動を成立させていくために、「今できる行動」に注目し、「ひきこもりのままでできる」行動の機会をつくろうということ、今ひきこもりのままでできる仕事を創出し、仕事をする行動の成立を援助しています。

そういう意味では、私たちの活

動を理解してくださって、仕事を提供してくださるということ、ありがたく思っています。

**牧野** こちらとしては、特に時間にこだわる必要もなかったのですが、そのように対応しただけなのですが、そのように言っていただけだと、何だかうれしいですね。

### めぐりめぐって つながる支援

**牧野** 私たちは、FSJGさんのことを仕分けのプロと呼んでいるんですよ。

**上田** ダンボール箱いっぱいの使用済みインクカートリッジを机の上にガバツと開けて、山のようになったそれを仕分けできたときの達成感や、箱にびっしり綺麗に詰められたときの爽快感も大きいですよ。

それに何より、テラルネさんの活動であるウガンダの元子ども兵支援と、今、自分たちがやっているインクカートリッジの仕分け作業とがどのようにつながっているのか話を聞き、そのような世界と、本人たちの今「できる」ことがつながっていると思うと、すご

い！嬉しい！不思議！が混ざってワクワクしてきます。

**牧野** FSJGさんをお願いしている仕事だけではないですが、今自分がやっていることが、どこにつながっているのかということを考えながら仕事をするのは、とても大事なことだと思います。内容としては単純作業であっても、その先のことを思い浮かべれば、やる気も出てくると思いますし。

そういえば、テラルネの仕事を経て、FSJGさんを卒業された方が出たんですよ。

**上田** FSJGでは、FSJGの仕事以外の「仕事」、もしくは「就学」(学びの場)に自発的に参加するようになった時点で「卒業」としています。これまでに二名が、テラルネさんの仕事を経て、卒業しています。

**牧野** 卒業した人が出たと聞いたときは、とてもうれしかったです。

**上田** テラルネさんは、たくさんあるインクの仕分けを誰かにしてほしかった。私たちは、仕事を探していて、仕事をもらって助かった。そうすることで、日本のひき

こもりの子が、日本でひきこもりながら、社会(世界)でつながっていった。しかも、それだけではなくて、結果としてテラルネさんは、ひきこもり支援をやるつもりはなかったけれど、支援を行って行くことになった。回り回って、めぐりめぐって、支援はつながっていくんですね。

**牧野** そんなふうにと考えると、とてもおもしろいですよね。

### 否定の選択肢

**牧野** 以前、FSJGさんの活動方法についてお話を伺ったとき、本人さんに送られる仕事メニューに、「ノー」の選択肢があるというのが、とても印象的だったんです。

**上田** FSJGでは、当事者本人に毎月定期的に仕事メニューを郵送しています。そして、本人はメニューの中のやつてもいいと思う仕事を選択します。その仕事メニューの中に、「今はやりたくない」「返事をしたくない」「この方法に参加したくない」という否定の選択肢を必ず入れておくんです。

否定の選択肢は、否定することと保障すること、否定の意思表示ができる形で、本当に本人が望んでいることなのかを表明しやすいうように、確認する方法としての工夫なんです。

**牧野** 支援というと、支援を受ける側の意思よりも、支援をする側の方々が強く働く場合が間々ありますよね。あなたにはこれが必要だと思うから、私たちが手助けしましょう。そのような形の支援だと、支援を受ける人が本当に望んでいる支援になっているのか、疑問に思うときがあるんです。

もし支援を受けるのが自分自身だとして、本当はこうしてほしいと思っているのに、そのことを言うことができないとしたら、どうでしょうか。私なら、支援を受けなくても、むしろ、ありがた迷惑だと思いかもしれません。

**上田** 否定の選択肢がない場合、選択肢が二つあったとしても、それは二つのうちのどちらかをその人を選ばせていることになるんです。否定の選択肢というのは、本人が、自分がやりたいことを、自

分で選んで決めるための一つの方法なんです。

**牧野** なるほど。選択肢があるからといって、本人の意思を尊重したことはないかということですね。その人自身の主体性を尊重するという意味では、否定の選択肢というのは、とても大事なことなのですね。

### 一人ひとりと きちんと向き合う

**牧野** FSJGのメンバーは、何人くらいいらつしやるんですか。

**上田** メンバーは、いつも大体10名くらいですね。誰かが卒業したら、また別の誰かが入ってくるという感じですよ。

ただ、私たちが活動をしていく中で、助成金をもらって活動を大きくしたら、大きい事務所へ移つたら、と言われることも多いんです。でも、私はそんなことはしたくないんです。自分たちのグループを大きくすることよりも、当事者本人をよりよくしていくことがしたい。

**牧野** テラ・ルネッサンスでも、

一人ひとりに寄り添う支援を大事にしていますから、そこは強く同感できる場所ですね。量的なことだけに目がいつてしまつて、質的な面が疎かになってしまつてはいけません。と思いますし。

こうやって改めてお話ししてみると、FSJGさんとテラ・ルネッサンスでは、支援方法に対する考え方や、似ている部分がたくさんあるなと思いました。今回のお話を通じて私自身、自分たちの支援のあり方を見つめるいい機会になったと感じています。

一緒に活動している相手がどのような思いで活動を行っているのか、何を大切に思っているのかを知ることが、とても大事なことでと思います。そしてまた、お互いがそれぞれの思いのもと、誠実に活動に取り組んでいるからこそ、めぐりめぐってつながる支援も生まれてくるのではないかと思います。

今後またテラ・ルネッサンスを通して新たな卒業生が生まれてくることを期待しつつ、これからもよろしく願いいたします。

# 次世代が語る

## 佐野 光平 (さの こうへい)

大学在学中の2010年4月から2010年12月まで、インターンシップとして参加。物品販売事業に従事し、現在は大学院に在学中。



## 石川 綾 (いしかわ あや)

大学在学中の2008年4月～2010年3月まで、インターンシップとして参加。募金箱や、めぐるプロジェクトに従事し、現在は広告会社で働いている。



## 栗田 佳典 (くりた よしのり)

静岡県出身。1年半のインターンシップを経て、大学卒業と同時に職員として、テラ・ルネッサンスに勤務。日本国内での業務を担当し、広報、経理の仕事も兼ねながら、年に約20回、主に教育機関にて講演を実施。アフリカで出逢った元子ども兵や自身の心臓病の体験を通して、「いのち」の大切さを子どもたちに伝えている。



# の未来

# NPO

きっかけは  
それぞれの興味・関心から

**栗田** インターンOBの佐野さん、OGの石川さんと一緒に、テラ・ルネッサンスでの活動を振り返りながら、これからのNPOの在り方、テラ・ルネッサンスの進むべき道について、話をしたいと思います。まずはお二人のことをお聞きしていきたいと思います。インターンとして関わっていた時期を教えてくださいませんか。

**石川** 私は2008年4月～2010年3月まで、インターンをしていました。特に中心に行っていたのは、2008年の大学3年生の時です。  
**佐野** 私は2010年4月～2010年12月まで、インターンをしていました。京都のNPOが協同でインターンシップ生を受け入れる長期実践型NPO・NGOインターンシッププログラムの制度で入り、テラ・ルネッサンスの10周年記念イベントも経験しました。  
**栗田** 二人とも2010年にインターンを卒業し、3年経っています。

す。今はどのようなことをされているのですか。

**石川** 私は、現在、広告会社に勤めて3年目になります。主にフリーペーパーの企画営業と原稿作成をしています。  
**佐野** 私は、法学部を卒業し、大学院に進学して、政策学研究科のNPO・地方行政研究コースで、日本を対象に、人々の暮らしが幸せになるための研究をしています。同時に、「地域公共政策士」の資格取得に向けても、取り組んでいます。

**栗田** ありがとうございます。まずは、テラ・ルネッサンスの活動を振り返ってみたいと思います。テラ・ルネッサンスになぜ関わろうと思ったのか、その背景を教えてください。

**石川** 私は貧困問題などに関心があり、テラ・ルネッサンスとの出逢いは大学2年生(2007年)夏に京都駅で行われたイベントでした。当時のスタッフからボランティアを紹介され、それ以降はボランティアとして、イベントや事務所での作業に関わっていました。

カンボジアの歴史を知り、これまでのツアー参加者やスタッフからの推薦もあり、現場を見てみたいという想いから、2008年春のカンボジアスタディツアーに参加しました。その後、インターンシップとして、主に募金箱のプロジェクト、そして「めぐるプロジェクト」(当時は回収事業)に従事していました。偶然ではなく、関心と縁が重なって、必然的にテラ・ルネッサンスでのインターンになったのだと思います。

**佐野** 私は3点あります。1つ目は、主体的に学校生活を送ってみたいと考えていたこと。2つ目にNPOの職員がどのような思いで働いているのかを知りたかったこと、そして、緊急性が高い事項に対し、自分の一歩を踏み出してみたいからでした。

大学のゼミの先輩がテラ・ルネッサンスでインターンをしていた姿を見て、「なんであんなに主体的に取り組めるのだろう」と興味がありました。さらには、大学の授業で、鬼丸さんの講演も聞いて、ただ何となく大学生活を送るのでなく、

そこに意義を見出して取り組むことの重要性を知り、NPOで働く人たちが格好良く見えました。そこに自分も加わりたいという、そんな思いが当時ありました。

**栗田** 長期実践型NPO・NGOインターンシッププログラムは他のNPOの人たちとも出逢える機会がありましたよね。

**佐野** はい。この制度があつてよかったと心から思っています。国際協力という分野の入口から入りましたが、実際に今、私が入り組んでいるのは、まちづくりです。その背景には、インターンシッププログラムで培われた経験と人脈が活かされていると思います。関心の枠がどんどんと広がりました。

インターンシップとしての活動は、進路選択にも強く影響した

**栗田** では、そんなインターンシップを通しての変化を教えてくださいませんか。

**佐野** 受け身ではなく、自らが動くことの大切さを学びました。



(左) めぐるプロジェクトでメーカー別、色別に仕分け作業を行う石川さん (右) 10周年のイベントで活躍する佐野さん

時代を振り返るとそう思いますね。  
**栗田** 学生の時と社会人の時と振り返るタイミングによっても感じ方は変わってくるのですね。  
**石川** そうですね。実際、今、社員として働く中で、企画書やパワーポイントなどの資料作成の時も、当時のことを思い出し、作業にあたっています。インターンシップでの経験がつながり、社内でも評価されています。当時の職員の方が教えてくれたことが、ここに活かしているなと実感しています。  
**栗田** 佐野さんは今の生活で活きていることはどんなことでしょうか。  
**佐野** 国際協力はやればやるほど、壁にあたると私は思います。グローバルな社会の中で、途上国の貧困問題は少なからず、先進国に原因があるからです。大量生産・大量消費の時代の中で、国際協力活動は大切なことなのですが、対症療法とはなっても、根本治療にはならないのではないかと私は思います。先進国に住む私たちの暮らし自体が改善されないといけないのです。だからこそ変わるべきは先進国。そしてそこに住む私たちです。



政府や自治体が「公」、市民一人一人が「私」だとすると、そこをつなぐ「共」となるのがNPOなどの市民団体だと思います。私は、中に入ってNPOを知れたからこそ、社会の仕組みを考えていきたい、そして実践していきたいと考えられるようになりました。  
**NPOへの期待、これからの未来に向けて**  
**栗田** 「共」のNPO、市民団体というキーワードが出てきましたね。NPOはどんな状況が理想なのでしょう。自分の経験や立場から、テラ・ルネッサンスがこうあってほしいという期待はありますか。  
**石川** NPOは「距離が近い」ということが最大の特徴だと思います。草の根と言われるように、市民に近い存在であり、テラ・ルネッサンスは入口がたくさんある分、つながりが枝葉のように分かれています。私は、その距離が近かった分、インターンがしやすかったで

活に活きていることはありますか。  
**石川** 私は、募金箱の事業や、他のインターン生と、めぐるプロジェクトにも取り組み、企画をしている事業をどうやって広げていけるかを任せられ、取り組める環境があったことを今、振り返ると嬉しく思います。学生にそこまでの機会をつくるということは容易ではないと思いますので。  
 スキル面で言うと、相手にどう伝えるか、企画、広報、まとめて発表するといった一連の流れを行い、具体的に何をポイントにして伝えたいかを学び、人を巻き込むことに対する取り組みについて、考える機会をいただけました。自分が社会に対しての変革を行うチャンスだったのだと思います。私にも、できるんだということを実感し、自信となりました。そして、どんな立場でもアンテナを持ち続けることで、見える世界が変わり、自分自身も楽しむことで、相手を幸せにできるんだということもわかりました。今、インターンシップのすし、募金箱や、めぐるプロジェクトを通して、身近にできることを周りにも伝えやすかったです。物を買う支援も、物を集める支援も、お金を出す支援も「自分にこれならできる」と、昔に比べて、生活に浸透している部分が大きくなっているからこそ、もともとNPOと企業が協働したり、NPOと行政が協働したりして、社会貢献というものの距離が近くなるのが理想です。  
 ただ、「支援」という言葉に区切ると、被災地や紛争地での緊急支援など目に見えやすいものへの支援が多いのは確かです。復興支援や自立支援といった海外での活動はまだ見えにくいところがあり、遠く感じてしまうものです。その差を埋めていくことができればいいなと思います。  
**栗田** NPOがこうだったら関係されるというものはありますか。  
**石川** 企業の中にも興味がある人はたくさんいます。あとはその思いをいかにアクションに移すかというきっかけと仕組み作りが必要ですね。そしてそれは、一時的な

そして、国際協力の活動が社会変革につながることを実感しました。また、インターン同士で企画を練ったり、イベントでの説明を通して、伝えていくことの技術も身に付きました。  
**栗田** 具体的にどのような進路をお考えですか。  
**佐野** 地域社会が豊かにならないと、世界の平和も始まらないと思います。そのためのまちづくり。まちづくりはすなわち、人づくりだと思っています。人が変化するためのきっかけをつくり、地域社会から平和を作っていくたい。社会の問題に対して、関心を持つ人を増やしたい。そんな仕事をしてみたいと考えています。  
**栗田** なるほど。きっかけはインターンシップで、そこから海外ではなく、日本に視点が移ったということですね。  
**佐野** そうですね。国際協力の活動をしたらこそ、今の私があります。国際協力は、私の原点と言っても過言ではないですね。  
**栗田** 石川さんは、テラ・ルネッサンスでの活動での変化や、今の生



(左上) 物品販売を行う佐野さん

(左下) 報告会にて発表をする石川さん

(右下) インターンシップ時代に行った講演の様子(栗田)



ものでは意味がなく、継続するものや、ことでないといけないと思います。

**栗田** そうですね。大切なのは、いかに続けるか、そのための仕組みを作れるかだと思います。一時的なものより、常に目に入るもの、例えばウガンダコーヒーを社内ですぐ利用したくといったことの方がいいのかもしれないですね。仕組みと仕掛けさえあればつながっていくと私も思います。

佐野さんはいかがですか。

**佐野** かつては、行政があつて、自治会や町内会などが機能して、個人まで届いていたサービスなどの仕組みが、高度成長とともに、人口が都市部に流出し、地域社会が多様化したことに伴い、行政と個人をつなぐ人がいなくなつてしまつたと思います。だからこそ、人と人、組織と組織、組織と人、NPOはそのつなぎ目の役割があると思つています。

テラ・ルネッサンスへの期待は、現地支援も大事ですが、日本社会にいかに関与を与えられるかということです。日本に住む人々

の意識を変えるきっかけを作ることで、新しい社会貢献活動などにもつながっていく。それによって、先進国社会が変わっていく。先進国社会が変わることによって、途上国の社会も変わっていく。私はそう思っています。

**栗田** その通りだと思います。NPOは社会の中で、常につきまぐりとなつて働いていく必要があります。その中で私たち20代は、ボランティアやNPOという言葉とともに成長してきたと言っても過言ではないと思います。これからは成長を続けるNPO業界の中で、私たちはどのような成長をすればいいのでしょうか。そして、私たちの時代の役割は何だと思ひますか。

**佐野** 将来、「平成という時代はひどかつた」と歴史で言われぬ時代であるために、それぞれの立場で、NPOというものが、社会に浸透していくための仕組みをつくること、そして、実際にNPOが仕掛けていくことだと思ひます。

**石川** 私もそう思ひます。今の時代、世の中のニーズや関心はすごいスピードで変わつていっていると思ひ

**栗田** そうですね。今のNPOの礎を築いたNPOの先輩たちの世代は、0を1にした世代であり、自分たちで団体をつくり、先陣を切つて、取り組み始めた方々だと思います。私たちはその背中を見て、続いている世代です。だから1から100にする役割があると思ひます。先輩から受け継いできたものを次世代にさらに良いものにして、繋げていく役割。そして、次に続く世代が働きやすいように環境を整備し、このような働き方があることを社会に認知されるため、色んな人に逢うこと、色んな人を巻き込むことが重要ですよ。

**石川** はい。今は物の量ではなく、質の価値。互いに工夫して、誰もがメリットあるものを生み出せたらと思ひます。

**佐野** NPO・NGOを立ち上げた人たちを個人商店とすると、これを様々な業界を交えて、ネットワーキングしていくことも、私たちの役割だと思ひます。企業も行政も、相互理解ができなければ、相互補完もできないと思ひます。

ます。だからこそ、殻を破り、これまでにはない視点も必要だと私は思ひます。先輩たちから受け継ぎつつ、アレンジを加えていく。私たちはその世代なのではないでしょうか。NPOに興味を持つている人にとつては、これからの興味を持ち続けてもらうための仕組みをつくり、そうすることで、次世代につながっていく。知らない人に対しては、社会貢献というものを周りの環境をいかに日常に浸透させていくかが重要だと思ひます。

チャリティーカットをしている美容院もあり、たとえば、前髪カットは常に100円で募金になっていたり、定期的にイベントでチャリティーカットを行つたり、NPOを立ちあげて福祉施設で取り組みをしているところもあります。これからは、それが美容院だけでなく、どんなお店であつても、社会貢献につながる、社会貢献を意識できる社会になれば、自然に社会はより良いものになつていくと思ひます。

「競歩」ではなく「共歩」の社会へ

**栗田** そうですね。柔軟性も大事だと思ひますし、パートナーシップを組んで、ともに歩んで行くことも大切ですよ。企業にしても、NPOにしても、行政にしても、WINWINの関係でもともに歩んで行くパートナーシップですね。そこにテラ・ルネッサンスはあらゆる接着剤として、希望も思ひもつないでいく存在なのだと思ひます。

**佐野** だからこそ、これからの社会、重要なのは「競歩」ではなく「共歩」ですかね。

**栗田** うまい。様々な業種がともに歩む社会。これを私たちの世代がより声をあげて、動いていかなければいけません。具体的に、テラ・ルネッサンスではまず、二人のような人財が、たくさん世に出るように、インターンシップの受け入れや国内での啓発活動にはさらに力を入れていきたいと思ひます。

今日は2人の話を聞いて、私自身、勇気が出てきました。ぜひ、今のそれぞれの立場を活かし合いながら、手を取り、ともに歩んでいきましよう。

**SUN-STEP**  
Set up a scaffolding

**Home Tile Carpet**  
ホームタイルカーペット

フローリングに置くだけで使える。  
組み合わせ自在の新しいカーペット。

サンプル請求・商品の購入はこちら  
<http://www.japancarpet.com>

**伊豆 石舟庵**  
せきしゅうあん

伊豆の自然と歴史、  
文化をお菓子に託し  
お客様の笑顔と  
至福の時間を  
創造します。

桜まんじゅう

**株式会社 お茶村**

〒834-0066 福岡県八女市室岡1069  
TEL.0943-24-0001 FAX.0943-24-0099  
営業時間 月～土9:00～18:00まで  
日曜祝日休み

ホームページもご覧下さい <http://ochamura.jp>

人々と出会う旅 **航空券**  
オルタナティブツアー **海外旅行**  
**MY TICKET** スタディツアー/海外体験学習

マイチケットがオルタナティブツアーを始めたのは1981年。長年の「人々と出会う旅」の経験を生かし、海外旅行のお手伝いをいたします。

国際協力の現場を訪れる「スタディツアー/ワークキャンプ」や大学の「海外体験学習」など、観光旅行とは異なり、旅程管理や危機管理の難しいツアーも経験豊富です。ご相談ください！

個人旅行・海外出張  
のご相談もー **マイチケット**  
航空券・ホテル・査証・ガイド通訳

Alternative TOUR  
〒800-0004 尼崎市武庫川町4-27-1 info@myticket.jp  
TEL 06-4869-3444 www.myticket.jp

**有限会社アイディー**  
＜学習がた人材派遣＞  
人と人のつながりを大切にします。  
MG研修、読書会、笑いヨガなど、学び、  
実践することで人生を豊かにしましょう！  
〒518-0833 三重県伊賀市緑ヶ丘東町914-2 美旗屋ビル201  
電話 0595-21-7776  
代表取締役 藤川直紀

おいしさのヒミツは  
ウガンダの恵み。  
**自然栽培コーヒー**

ウガンダの豊かな自然と、そこで暮らす人々のあたたかな手によって大切に育てられた無農薬無化学肥料コーヒーです。

**テラ・ルネッサンスを応援します。**

株式会社クリスタル  
愛知県春日井市知多町2-127  
TEL: 052-354-8282  
E-mail: natural@katsuhara.jp

ご家庭に 職場に

1日1本からでも  
週1回からでも宅配します。

電話無料です 幹明治特約店 **(株)デミック**  
0120-366-039 FAX:078-907-3771  
【電話受付時間】月～金曜日 / 午前9:00～午後5:00

テラ・ルネッサンスにご支援いただき、  
ありがとうございます。

個別指導 **明光義塾**  
**ジプロス**  
Produced myself  
総合教育と人材育成  
新体感型学習プログラム

3つの「わ」が鎌倉投信の信条です。  
100年続く信頼の「わ」、100年愛される長寿投信を目指します。

いい会社をふやしましょう  
**鎌倉投信**  
KAMAKURA TOUSHIN

鎌倉投信株式会社  
〒240-0005 神奈川県鎌倉市豊下4丁目5-3  
お問い合わせ先 TEL: 050-3536-3300  
E-mail: [Contact@kamakuraim.jp](mailto:Contact@kamakuraim.jp)

崇元寺石門向かい  
**(株)琉球補聴器**

きこえの絆を  
この島へ  
☎ 863-4133  
ヨイミミ

美しく健やかに。いきいきわくわく楽しい毎日を応援します。

トータルヘルスデザインは、「自然に学び、自然に帰る」をモットーに、美しく健やかに生きるために必要な情報・画期的な商品をいち早くお届けし、新しい暮らしをご提案させていただくことを使命としています。

●毎月無料でお届け。ほんもの情報誌「元気な暮らし」



0120-15-1846まで  
お申し込みくださいませ。

「元気」と「キレイ」をサポートする最新情報&アイテム、時代の最先端をいくキーパーソンのインタビュー、セミナーなど情報満載です！



- 根源的な世界を探究する「バンクシアブックス」の出版
- ブログサイト「希望の星」の運営

“元気の力”を暮らしに生かす

●元気の力を高める  
本物商品の販売

- ★京都本社ショールーム
- ★東京元気アップショップ
- ★トータルヘルスデザイン WEB SHOP

京都本社、東京元気アップショップに、ショールームを完備。実際に手に取って、商品の「気」を感じていただけます。お気軽にお立ち寄りくださいませ。



- 体と心と宇宙を結ぶ バンクシアフィットネス
- 毎月1回、大阪・東京で開催 美と健康セミナー
- 各種セミナー & 個人セッション
- 食と農の研究
- 日本全国イヤシロチ化



“元気の力”を暮らしに生かす

株式会社トータルヘルスデザイン

フリーコール 0120-15-1846

トータルヘルスデザイン

http://www.totalhealthdesign.jp/



京都本社  
〒619-0223 京都府木津川市相楽台9丁目1番1号  
TEL. 0774-72-5889 FAX. 0774-73-3740  
東京元気アップショップ（東京営業所）  
〒105-0014 東京都港区芝3-4-11 芝シティビル7階  
TEL. 03-5444-3241 FAX. 03-5444-3243

## 株式会社 西井製作所

本社・工場

〒736-0055 広島県安芸郡海田町南明神町1番17号 電話 (082)821-0241 FAX (082)821-2494  
Mail: nishii@hiroshima-nishii.co.jp URL: http://www.hiroshima-nishii.co.jp

鳥栖工場

〒841-0005 佐賀県鳥栖市弥生が丘7丁目11番地 電話 (0942)87-7550 FAX (0942)87-7560

《営業品目》

自動車ナンバープレート  
各種標識、電気部品、棺金具、各種塗装品  
航空機部品・半導体部品・半導体関連機器・精密治具金型  
各種自動機設計・開発・検査

goods & wears

cafe & foods

farm

〒604-8066 京都府京都市中京区伊勢屋町351  
mumokuteki goods & wears B1F-1F mumokuteki cafe & foods 2F http://www.mumokuteki.com/

humanforum 株式会社ヒューマンフォーラム

気づきとホスピタリティーの精神で  
「感動の家づくり」を实践致します



私たちは2×4工法専門の建築会社です

TOTAL HOUSING Co.

www.total-housing.net

本社:鹿児島県鹿児島市西陵3丁目28-22  
TEL 099-210-5120 / FAX 099-282-3003

ひとを想ってつくりました

京都北山杉を使用したオフィス家具で、知的生産性の向上を。木のあたたかさや香りで、仕事にも自然とリフレッシュする。天然木材の特徴をいかしたオフィスづくりを提供します。

働く環境の総合商社  
株式会社ウエダ本社

〒600-8103 京都市下京区五条通堀角角塩釜町 363  
TEL 075-341-4111 FAX 075-341-5738

## 株式会社塚腰運送

〒600-8266 京都府京都市下京区木津屋橋通大宮東入上之町 444  
TEL: (075) 343-0330 FAX: (075) 371-6733  
Eメール: info@tsukagoshi.ne.jp

京都・滋賀の住設機器 管工機材のことなら、私たちにお任せ下さい！



株式会社 ヒトミ

京都府京都市伏見区深草西浦町 8 丁目 133-1・2  
TEL: (075)642-4121 HP: http://www.hitomi-net.jp/index.html

## ISFnetグループの取り組み

### Eco&Employment - 環境保護と雇用創造

ISFnetグループの大義はE&Eであり、就労の機会に恵まれない方々に対して、積極的に雇用機会を創って行くこと、更に自然環境へ与える負荷を最小限にとどめ、次世代に繋げて行くことにあります。この大義に基づき、当グループは営利企業としての利益追求活動と、ソーシャルカンパニー(社会貢献型ビジネス)としての活動を双方持ち合わせたビジネスモデルを確立して参りました。

当グループは創業当初から「経営哲学」の重要性を一貫して掲げており、利(益)と理(想)のバランスを追求してきた結果が今の私たちのビジネスモデルの形と考えております。

### 雇用創造

ISFnetグループは、2011年に雇用創出に関する積極的計画「20大雇用」を発表しました。その対象者は、一般的には就労困難とみなされている方々です。以来、当グループでは、就労が困難とされている方々が働くことが可能となる就労環境の整備に取り組んで参りました。

### 環境保護

私たちは、常に環境保護活動に関する改善を行っています。企業として環境を保護することが、組織レベルでも個人レベルでも重要であり、企業方針や社員のボランティアを通じて、私たちはエネルギー消費を削減し、資源の使用効率を改善し、紙・PCなどをリサイクル・再利用しています。

### Diversity - ダイバーシティ経営

ISFnetでは、履歴書を重視しないなど、オープンな採用方針を掲げており、性別、性的志向、年齢、人種、障がい、社会的背景、宗教、そして国籍を問わず採用しています。私たちの経営哲学は職場での多様性を推進するようになっており、雇用の多様性を追求して行くことは倫理的にも、道徳的にも正しいと考えています。

ダイバーシティ経営を推進することは、当グループのステークホルダーや関係するコミュニティの皆様の良好な長期的関係を作り出すことにつながり、結果として当社の経営基盤の強化にもつながって行きます。

種類	対象者	(グループ全体障がい者採用率) 5.14%(2012年6月現在)
精神障がい	83名	
身体障がい	6名	
身体障がい(重度)	5名	
知的障がい	12名	
知的障がい(重度)	3名	
合計	109名	



### 主な受賞履歴

- 2013年6月 第2回HRチャレンジ大賞「人材マネジメント部門」優秀賞
- 2013年3月 経済産業省「おもてなし経営企業選」選出
- 2013年3月 経済産業省「ダイバーシティ経営企業100選」選出
- 2013年2月 第18回人にやさしい街づくり賞(愛知県)受賞
- 2013年2月 男女共同参画推進事業者表彰「きらり大賞」受賞
- 2012年11月 第6回ワーク・ライフ・バランス大賞 大賞
- 2012年11月 第3回ビジネス・イノベーション・アワード2012 優秀賞
- 2012年10月 平成24年度均等・自立推進企業表彰 東京労働局長優良賞
- 2012年4月 BCAA アワード2011 奨励賞受賞
- 2012年3月 平成23年度 文部科学省後援ビジネス実務マナー技能検定「団体優秀賞」
- 2011年12月 茨城県子育て応援企業表彰 仕事と子育て両立支援部門 優秀賞
- 2011年11月 愛知県ファミリー・フレンドリー企業登録制度
- 2011年11月 広島市子育てに優しい事業所表彰(広島支店)

### ISFnetグループの掲げる20大雇用とは何か?

20大雇用の20項目に該当される方に対して、当グループではこの項目を理由として採用の可否を決定いたしません。その方の履歴書や過去は重視せず、未来への意識を持った方、当グループの倫理やCSHの習得へ向けて努力をして頂ける方の採用をさせていただきます。

1. ニート・フリーター
2. FDM(注)\*
3. ワーキングプア
4. 引きこもり
5. シニア
6. ボーダーライン
7. DV被害者
8. 難民
9. ホームレス
10. 小児がん経験者
11. ユニークフェイス
12. 感染症
13. 麻薬・アルコール等中毒経験者
14. 性同一性障害
15. 養護施設等出身の方
16. 犯罪歴のある方
17. 三大疾病
18. 若年性認知症
19. 内臓疾患
20. その他就労困難な方

\*注)アイエスエフネットグループでは障がいのある方を「未来の夢を実現するメンバー」として、FDM(Future Dream Member)と呼称しております。

### 書籍のご紹介

- 2008年7月 「未来ノート」で道は開ける! 定価/1,365円
- 2010年10月 社員みんながやさしくなった 定価/1,470円
- 2011年5月 社長のメモ 定価/1,365円
- 2011年9月 会社は家族。社長は親 定価/1,470円
- 2012年3月 雇用創造革命 定価/1,575円
- 2012年9月 美点重視の経営 定価/1,575円
- 2013年9月 お母さん、障がいの子どもを応援しますよ。 定価/1,470円
- 2013年9月 日本でいちばん育てたい会社 定価/1,575円



私たちは、  
『テラ・ルネッサンス』を応援しています!

## 中井隆栄経営塾

『幸せな成功者』育成塾  
塾長 中井隆栄 & 塾生一同

仕事、お金、人間関係の「悩み」が解決し、次々と夢がかない出す  
年収3,000万円から1億円の経営者を続々輩出する日本最高峰の経営者養成講座

中井隆栄経営塾

『幸せな成功者』育成6ヶ月間ライブコース

<http://www.magicclamp.co.jp/>

ロングセラー『ぼくは13歳 職業、兵士』から6年、待望の続編刊行!

## ぼくらのアフリカに戦争がなくならないのはなぜ?

NPO法人テラ・ルネッサンス理事長  
小川真吾[著]



爆撃で死んでいく子ども、おなかをすかせたまま死んでいく赤ん坊、家族や親戚を殺害する子ども兵……アフリカでつづく悲惨な日常のうしろがわに、「正義」という名前の暴力があった。歴史のなかで、積み重ねられたアフリカの悲しみは、日本にいるわたしたちとつながっていた。

●A5判160ページ/1365円(税込)

富永愛さん推薦!



## 10刷出来 ぼくは13歳 職業、兵士。あなたが戦争のある村で生まれたら

鬼丸昌也・小川真吾[著] ●A5判144ページ/1365円(税込)  
毎年50万人、毎分1人の命が小型武器によって奪われている。そして、小型武器を持たされ戦わされているのは子どもたち。この悲惨な現実をまず知って欲しい。

一青窈さん推薦!



クラスター爆弾啓発 漫画冊子  
完成しました！

内容に関するお問い合わせは、こちらから

E-mail [contact@terra-r.jp](mailto:contact@terra-r.jp) TEL / FAX 075-741-8786



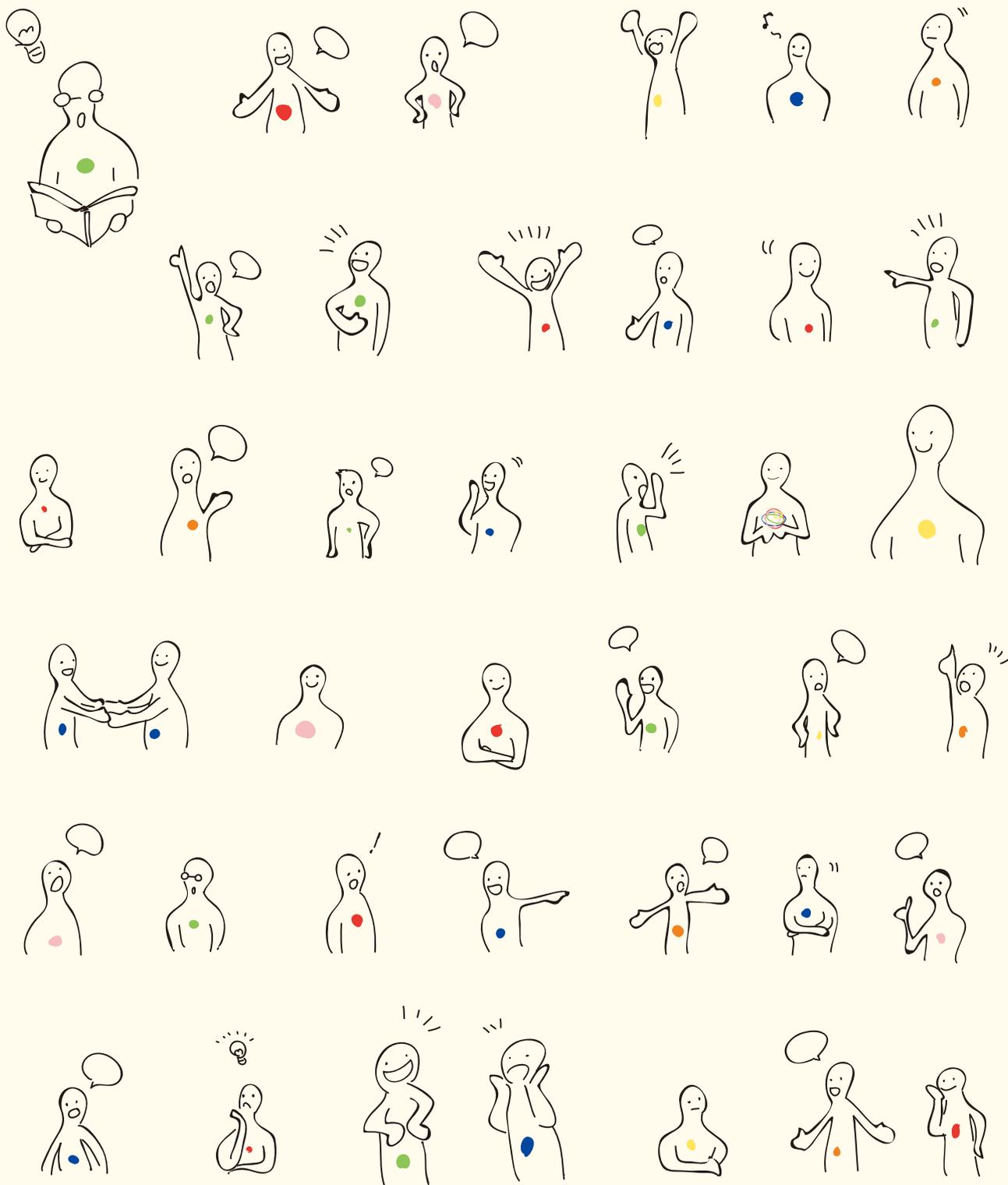
## 2012年度 国際交流基金 地球市民賞を受賞しました。

このたびの受賞は、ひとえに日本にてテラ・ルネッサンスを支えてくださっている  
支援者の皆さま、ならびにインターン、ボランティアとして活動に参加して下さった皆さま、  
活動地にて想いに共感いただき、ともに活動を行った関係者の皆さまのお力あってのものです。

皆様とともに受賞できた、地球市民賞は私たちの誇りでもあります。

今後もテラ・ルネッサンスはスタッフ一同力を合わせて、世界中の協力者とともに、  
すべての生命が安心して生活できる社会の実現をめざし、活動を続けて参ります。

特定非営利活動法人 テラ・ルネッサンス 理事長 小川 真吾



デザイン協力：小田 起世和 (ワトナス)